

特 8

302

お玉いなり

躑月著

093060-000-2

特8-302

お玉いなり

小林 躑月/著

M26

DBQ-0391



特8  
302

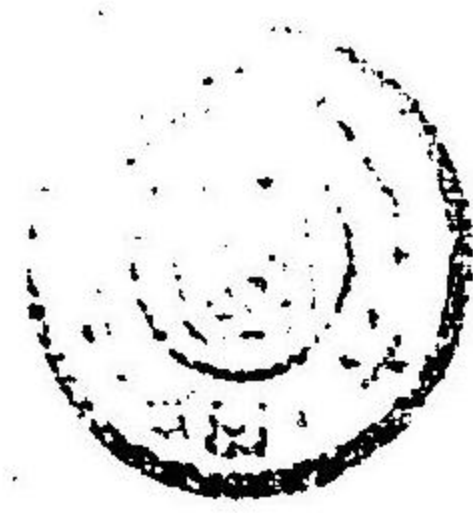
# 玉潤齋



集英堂  
土產  
梓

聖  
子  
河

玉潤齋  
踏月  
著作



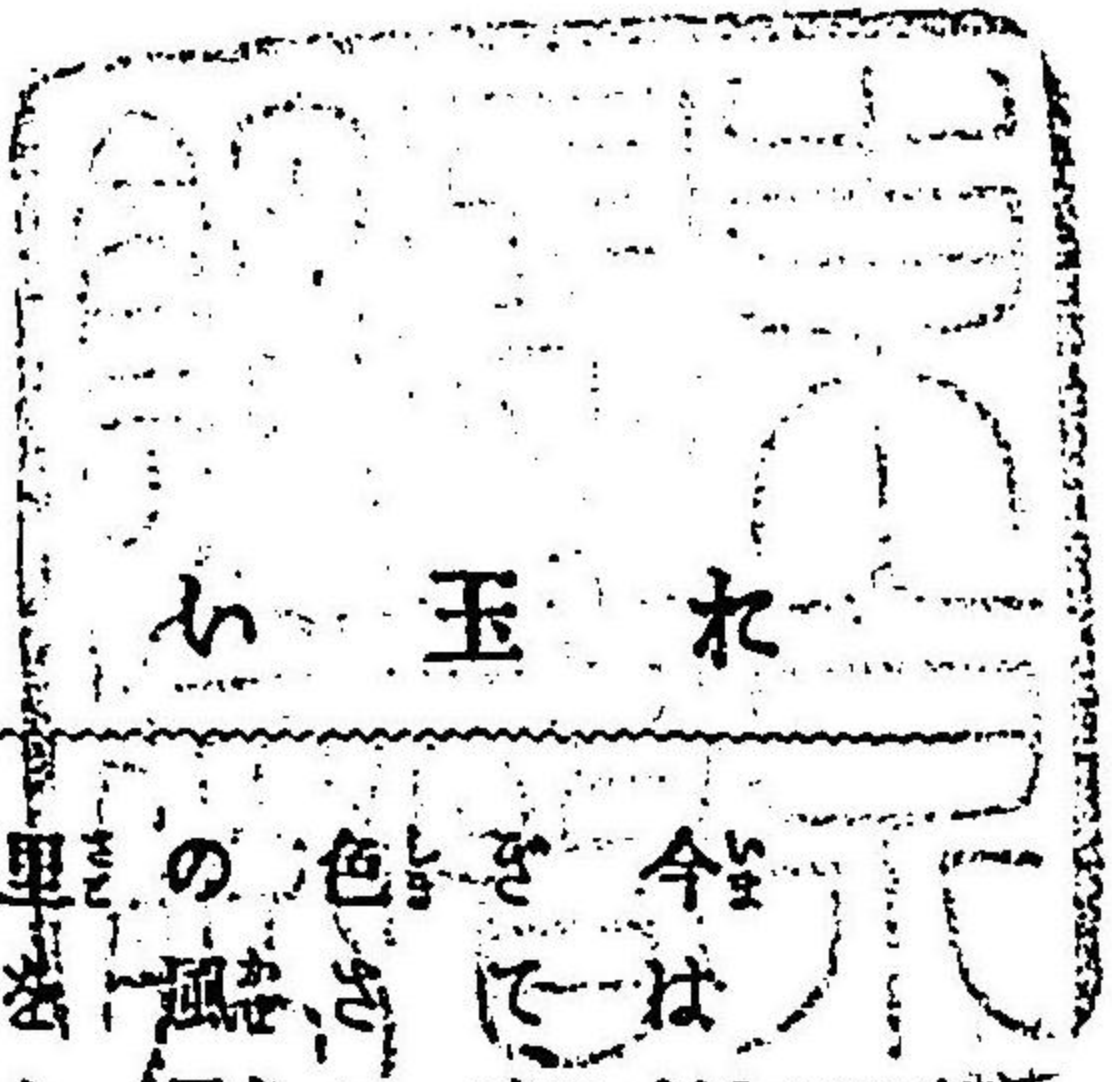


お玉いなりはとがき  
哀れ下毛の天地に一ツの名物ふやとてくれんど身にも  
日ぬ大願を起して、關東の紙上に出入二ヶ月が間お眼を  
汚せし貞婦お玉乃來歴幾千の讀者がお玉の爲めに流し  
て下されし涙の露を硯の海に二度の色上げ品は古くも  
地体は絹所班のはぎ目は著者が染返し其日に追はるゝ  
新聞屋の續きものと侮つて二度と讀む氣のないお方は、  
無理に讀むで下されずとものこと、冥土に眠るお玉への  
義理一本だけは是非ともく。

明治二十六癸巳の秋十月上浣

爵宮江街の倚居に

蹴月庵主人識



(一) り な い 玉 れ

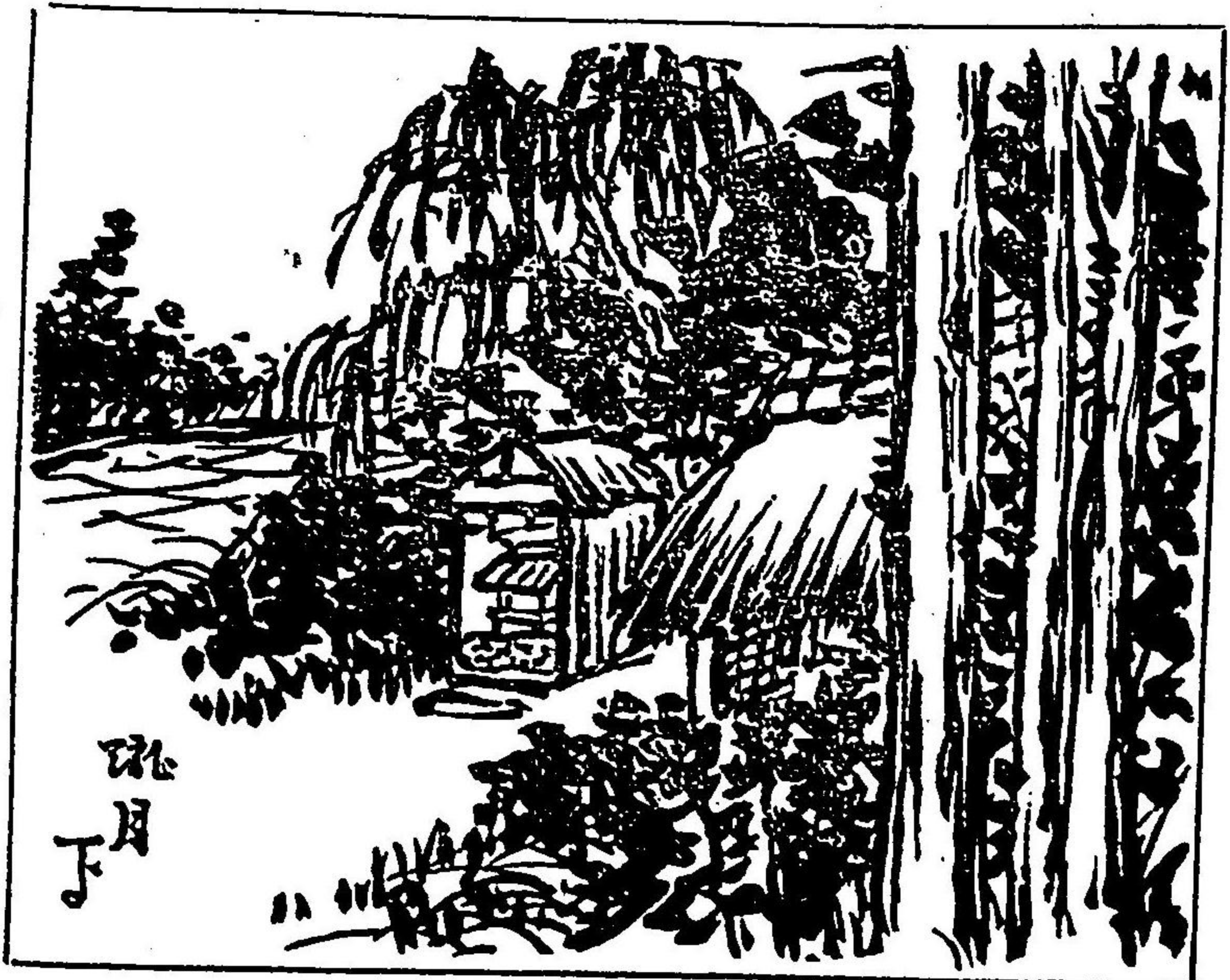
今村も水代と變り、五ツの大字五百余戸、北に岩舟の絶景を仰  
 ぎて、東に思川の清流を望む、西南十里濃淡の緑に依り、惜氣なく彩  
 色をたると、扇の如き萬頃の沃土、米家幾点の村落を包みて、自治  
 の風を乗らしか、吹く別乾坤、誰やらが謳ひし自由の接む處とは、斯る  
 里を言ひしにやあらんと疑ふばかりなれど、口には只九二百年  
 人間五十年の壽命と定め、僅かに四代永うて五六代の變遷に過  
 ぎざりし二百年の已往を問へば、此邊り一面の平地を西御の郷と  
 呼びて、下毛一ヶ國に大合せて十幾大名の一人なりし木田大隅  
 守の家臣なりける須藤某が支配地なりしが、元祿の初めより正徳  
 と云ふ年号の終り頃まで此西御の郷新井村の西外れ、俗に下新井  
 となん呼べる處に、人の心の黑白は露白糸の染加減、田舎娘の手に

其 一

蹴月庵主人

れ玉いなり

野州 下都賀 水代 村 玉 荷 真景



りなれ玉お (二)

出来し地織木綿や手拭地、さては祭禮の揃衣など、堆きまで引き受けて、紺屋の明後日は定文句、今度こそは確かと、口を酸くして一人を返せば、又入り替つて来る催促、お天氣都合のわるき爲め、存しなから延引と女房の世辭に余儀なくも、眩きながら立ち返る客の絶間のなきまで、に繁昌を極めし紺屋ありけり、主人は吉澤庄太夫とて、年の頃は三十二三、片田舎の紺屋つれには、最と珍らしき、夫肌他人が一言頼むとし言へば、滅多に頭は掉らぬ性質とて、家業の方は大抵に妻のお玉と職人頭の與四郎と云ふ壯者に任せきり、已れは始終人の爲めに他出の方が多くして、夜分も自宅へ歸らぬことさへ珍らしからず、男振りは好きと云ふは、さにもあらぬと、は並々に勝れて高く、色はチト黒過ぎる方、目鼻立ちはキツパリと、して男らしき男なり、妻のお玉と云ふも、良人に劣らぬ氣、丈女、連れ添ふて早や五六年の今日まで、遂に一度良人に嫌な顔さへ見せず、今年漸く四歳に、ある庄太郎と云ふ男兒を對手に、血氣の職人を使ひて、あして家事萬端を賄ふばかりか、皆て婦人の嗜みを忘れず、目

りなれ玉れ (三)

の同るほど忙しき中にも、鬢の毛一すじ乱して居たることさへなければ、天性の美しき顔一層に光澤を増して、婦人は最早晩れとそ云ふ二十七歳の此頃になりても、芝居で見ると世話女房、其儘じやと風評され、村の老人衆が已が家の嫁女や娘を叱るにも、紺屋の嫁ツ子が直似をしろくと口僻のやうに言ふも、道理、抑もや此れ玉が親御と云へるは同じ新井の村中なれど、俗に田向ひ坪と呼びて、庄太夫が屋敷より四丁ほど西の方に、三四枚の畑を隔てたる彼方に、て田村金左衛門てふ舊家にて、お玉の實父金左衛門と云ふは、此時代にも又とあるまじき博識家にて、特に佛學の道に志厚く、人界の因縁を諦めたる人なりしかば、利達の心、毫釐もなく家の財産は早く皆長男の與左衛門に譲り渡し、已れは屋敷の裏手に有る森中へ、直入庵と號したる形ばかりの草庵を繕ひ、浮世の外に立木の墨染衣、阿伽の桶、爐に折りくべる松の葉も、手から拾ふ庭の面、實にや心の自在、鍵、沸る茶釜の音さへも、松吹く風や秋の空、待道解、脱履、無量の身なりけるか、定期には勝つこと叶はず、娘お玉か庄太夫方へ嫁

(五) りな い 玉 水

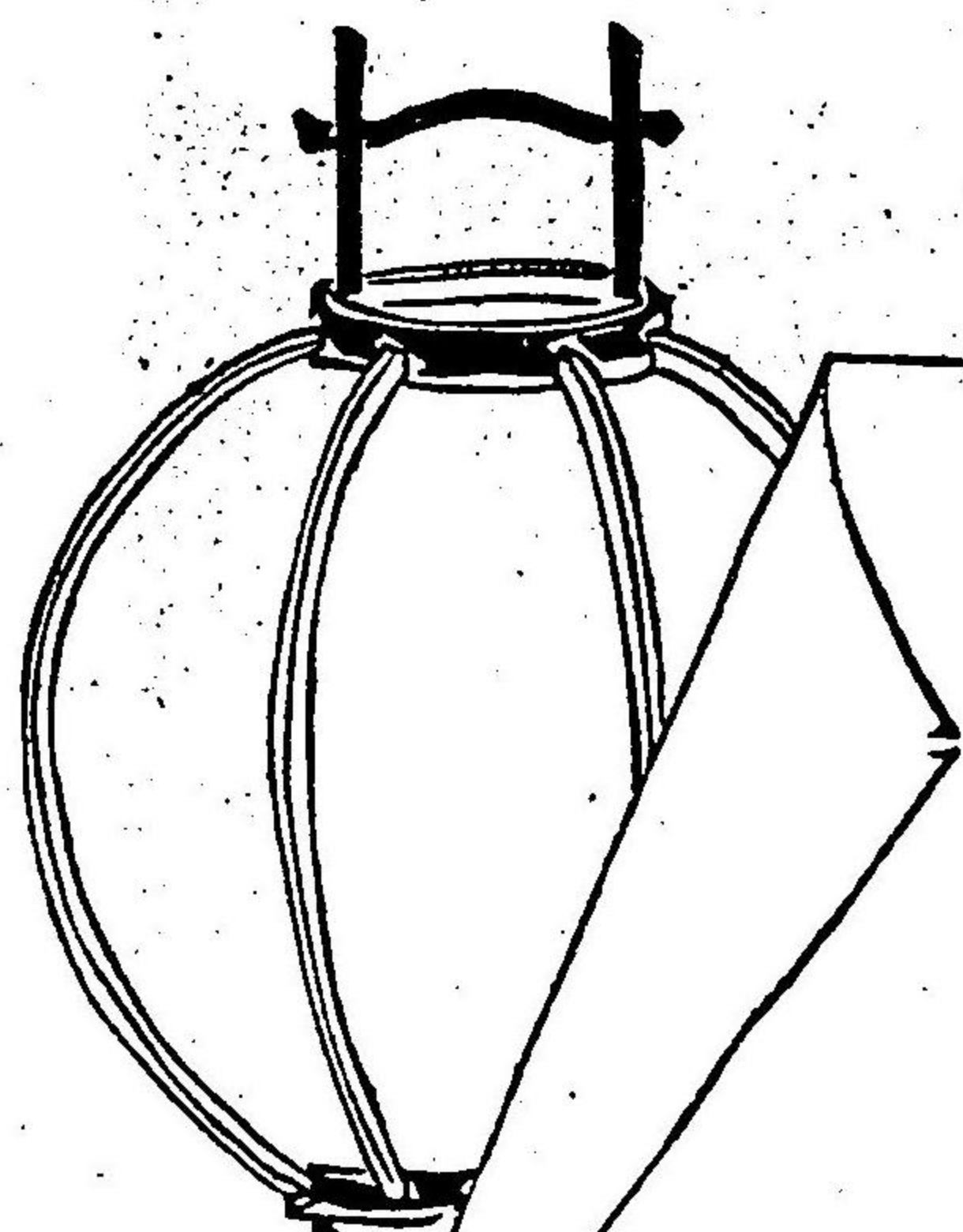
るべし、折しも、臺所の方より、片足には成人の藁草履を突かけ、片足には鼻緒のゆるみし女下駄を引つけて、駈け出し来る庄太郎、一番上には腰掛けて居し、奥四郎となん呼ぶ職人の膝に取つきあがら、可愛ざかりの片言交り、奥四郎や、母ちゃんが夕飯食べるって云ふに、奥四郎と呼べられし職人、ハイ、直ぐに今参ります、サア庄ちゃんも奥四郎と一所に行つて夕飯を食へませう、ちやア行かうよ、サア参りませう、善公も兵太も早く御膳を食へて仕舞ね、と云ひつゝ、奥四郎はドッコイショと掛聲を仕あがら、四才の庄太郎を肩車に載せ、職人共の先に立ち、勝手に至れば、玉はいとも甲斐なく、各しく襦袢をあやどり裾を端折て、家内中の膳立てより、蔬菜の配置をすまし、箸もて食へるばかりに拵へ果て、今しも行燈に火を照し、ながら、皆のドヤ、入り来るを見て心から出る愛嬌、顔は皆なマアさぞ草臥れたらう、モツと早く夕飯に仕やうと思つても、送ひモウ庄の奴が駄々を捏ねるものだから、ア、此方の飯櫃は昨夜炊いたのだけ、れども翌日まで置いて、腐敗なるといけなから、厭でも

(四) りな い 玉 水

入りする年の少しく以前、五十三歳を一期として、返らぬ旅に赴むきければ、今は全くお玉の實家は六十路に越にし、一人の老母と、兄と、奥左衛門が夫婦のみなりければ、兎に角お玉は在所ながら斯る稀人の子に生れ、斯る稀人の薫陶を受けて成人したる身に、しあれば、婦人一通りの道は愚か、讀書のすべさへも、尋常の男子には、優りこそすれ劣ることばかりしとぞ。  
其 二  
桐一ト葉落ちて秋をぞ知らるて、ふ八月の末ともなりぬれば、心なき身に、哀れを告げ渡る高勝寺の入り相に、職人共は仕事を息め、庭に乾したる糸や布をば取り入れて、裏の小川に手足を濯ぎ、先づ一喫と椀端に打ち並んで腰を掛け、鎮守の森に鳴き喚ぐ夕蟬の聲聞きながら、相も變らぬ、卑猥話、庄屋殿の娘ッ子は、而は赤いお姿は宜いと賞めるあれば、新田の牛太が、嗚アは何も乃公にムッてるやうだと、自惚の鼻うごめかすもある中に、巳ア女ッちよの談より早く夕飯が食へて、いと、突然に不平を鳴らすは、まだ新参の年期野郎な

り な い 玉 ね (六)

皆なして一膳づゝ助けてくれよ、チャ、庄ちゃんも又與四の  
 處へ纏みついて、庄太や御飯のすむまで母ちやんとこへ来てた  
 で、其様な言ふことを聞かないと、又何時かのやうに熱い、だ  
 よ、早く此へたいでと云ふに「いやだ、庄は與四が一番好きだか  
 ら」アレまた其様を言ふ、ソレ、阿父さんが戻つてじや、イ  
 エ、父様駄々を言ふのは庄太郎ではムいません、他所の子でムいま  
 す、早く此へたいでと、賺せば流石小兒心、與四郎の首を放れて、た玉  
 の膝へ駈けすがりぬ。  
 やがて職人共は、食事を果て、サア是からは此方の身躰じやと云は  
 ぬばかり、各自に用事を託けて夜遊びに出で行きしが、與四郎と呼  
 ばれし職人一人は、何故にや後に残りて、庄太郎を中に主人の女  
 房と差向ひ、商賈の談話に端緒を開きて四方山の話に暫時時を移  
 しける中も、庄太郎は只與四郎の膝に身を凭れて、頻りに手悪戯を  
 爲し居けるが、急に何やら思ひ出せしごとく、阿母ちやん坊は阿父  
 さん大嫌ひ、其次に阿母ちやんが好きさうして、與四郎が一番好きだ



鹿島  
潤



分



「フーム然かへ、何故一番與四が好きだへ」何故って阿母ちゃん與  
 四が一番坊を可愛がって、爾して何か買て呉れるもの、爾して面白  
 いところへ連れて行って呉れるから、阿母ちゃんより阿父ちゃんよ  
 り一番好きだ、爾して與四は坊をチツとも叱らないもの、と嬉し  
 さうに饒舌あがら與四郎の懐中へ眞綿の如き兩手を差込むで、有  
 もせぬ乳のあたりを探り回せば、庄ちゃん與四の處にはたッばい  
 はありませぬぞ、アハ、ハ、ハ、ハ、と苦笑ひながら「モシ内儀さん、私  
 はホンとに庄ちゃんが可愛くて、堪りませんよ」オホ、ハ、ハ、和  
 郎今の若さに珍らしい小兒好きと見ゆるね、和郎が其様あに可  
 愛がつて呉るものだから、和郎にばかり纏つて仕方がありやし  
 あいよと言ふ中にも、自から我子を可愛がつて呉れる與四郎の親  
 切をば、仇に思はぬ意味を含めば、與四郎極りわるげに庄太郎の背  
 をさすりながら「眞實に私は庄ちゃんの可愛のは別でムリますよ  
 御主人のなにを爾申しては濟みませんけれど、私には丸で自分の  
 子のやうに思ひます」と眞實を面に現はして言へば、お玉、と笑

ひあがら、和郎も早く嫁さんを買つて幾人でも拵にあさへオホ

其 三

我家に畜ふ猫の兒を他の人に貸めらるゝさへ餘り悪き心地はせぬものなり況して已が腹を痛めじ一粒種並に勝れて可愛がつて世話して大事にして呉れる者のあらんには如何に鬼神のやうな婦人なりとも其人を憎しうたてしと思ふまじ況して鬼神ならぬ紺屋のお玉一子庄太郎を吾子のやうに慈しみて馴睦む職人の與四郎を思ひ嫌ふべき等なく偏頗と云ふにはあらぬと萬事にいつけて與四郎々々々々相談するやうになりければ與四郎も又内儀さんの仰せとさへあれば夜半の使ひは思か火水の中に飛び込めと云はれても厭な顔せず正直一路に奉公しければ物心なき庄太郎までが一日と與四郎と親みこそすれ愛情の減すべき身は染み渡りぬ。

悪事は言ふまでもなし壁へ善事を行ふにも物には必らず中敷と云ふものありて此中敷を踏み外すときは自から他人に好なき疑ひを起さずること古今に其例少なからず職人の與四郎主人の子を愛せしめて別に悪きことにはあらぬと前々にも記す如く餘りに愛の度を過せしことの原因とありて朋輩を始め村人等にまでいらざる邪推を惹起されしのみならず果は紺屋の與四郎は主人の女房と怪しきなき途方もなきことまで言ひ觸らざるゝに至りしこそ洵とに是非もなき次第なれ。

抑も此與四郎と云ふは世の常の渡り職人と違ひ庄太郎の村より一里半ほど東北に隔りたる片柳村となん呼ぶ在所の生れなるが母には幼なき折に死別れ五十に近き與左兵衛と云ふ老父一人家にありて微かに煙を立て居れども與四郎は十四五の頃より今の上げし律義者縦しやぶ玉の方より手を把て掻き口説ばとて已れが一度び不義と思ひ込むではハイと承知をするやうな不仕舞な

人間にあらず、況して一方は貞女との風評高き玉、毫頭斯ること  
 のあるべき道理はなけれ、茲に一ツ世の疑ひを増さしめたる一  
 大事こそ起りたれ。  
 或夜の、例の如く主人庄太夫は、チヨと隣村までと出で行きし  
 ま、歸り來らず、職人共も夜歩に出で、残りしは與四郎一人、庄  
 太郎は晝の悪戯、疲れにや一間の片隅へ寝かされて、睡入花、蜚追  
 ふ野邊の夢にもまだ入るまじ。  
 お玉は行燈の傍に坐りて、良人の衣服を縫ふに、餘念なく、與四郎は  
 此方の燭、椽に胡座して、明日の仕事の、手省きにや、白糸の撰り分  
 一生懸命、時々談話は始むれども、手の方の忙しき爲めにや、其談話  
 さへ途絶勝なり。  
 定めぬあらぬ秋の空、何時の間にか、亦ボツと降り出して、庭の小  
 徑に當る響き、何とやらん物淋しく、左のみ更けしと云ふにあらぬ  
 ぞ、片田舎の習ひとて、開ゆるものは、犬の遠吠と、裏の流れの水音の  
 み、お玉は針の手を休めて、與四郎の方を振り向きながら、與四郎亦

何だか雨が當つて來やうだね、と、へい、爾仰しやれば、何だか又雨が  
 ボツと、ヤッて來たやうで、ふいふ、明日の朝に爲て、暗りやがれ  
 ば、宜う、ムい、ます、が、此、様、な、に、急、ぎ、の、染、物、が、澤、山、來、て、居、り、ま、す、か、ら  
 「眞實に然だね、別ても與四郎や、其札紙の付て居る五分染のか  
 なは、何、緑、り、合、せ、て、も、明、日、中、に、仕、上、て、貰、は、な、く、て、は、困、り、ま、す、よ、」  
 「イ、天、氣、さ、へ、宜、け、り、や、明、日、は、何、か、斯、か、や、ッ、て、仕、舞、ま、し、よ、う、」  
 是非、爾、して、お、吳、れ、よ、そ、れ、は、さ、う、と、與、四、郎、且、那、様、は、今、夜、も、又、遊、い  
 や、う、だ、か、ら、其、所、等、の、戸、締、り、を、し、て、寝、ん、で、お、れ、和、郎、達、は、格、別、朝  
 が、早、い、か、ら、「ハ、イ、爾、致、し、ま、し、や、う、だ、が、野、郎、共、の、歸、ら、ぬ、に、は、困、ッ  
 て、仕、舞、ひ、ま、す、毎、晩、々、々、九、ッ、過、ぎ、ま、で、何、處、に、ッ、ベ、い、ッ、て、居、や、が  
 る、の、だ、か、と、口、小、言、を、言、ひ、な、が、ら、糸、の、束、を、片、方、へ、押、付、け、て、裏、口、の  
 戸、を、締、め、や、う、と、す、る、時、フ、ン、と、與、四、郎、の、頬、を、掠、め、て、内、へ、飛、入、る  
 一、匹、の、黄、金、虫、お、玉、が、仕、事、を、爲、し、居、る、行、燈、の、火、を、目、が、け、て、跳、り、つ  
 き、しが、アレ、虫、が、火、を、と、追、ひ、拂、ふ、途、端、に、着、物、の、袖、も、て、パ、ツ、メ、リ、燈  
 火、を、打、ち、消、し、た、り、與、四、郎、や、虫、が、來、て、火、を、取、た、よ、早、く、燈、函、を、持、て、來、

一月のうちに三分一は家に居ぬ庄太郎も今日に限って何した表  
 か、午前より奥のト間に寝轉びて、腕を枕に庄太郎が裂き汚した  
 る草紙を拾ひ讀みに居たるが、今しも庄太郎が何気なく駈  
 け込み來りて「ア、阿父さんが寝て居るやう」と珍らしさうに  
 聲立つるは辨別のなき子心にも父の在宅を不思議と思ひしにや  
 あらん、庄太郎は睡む氣なる目を睜きて、布子の夜衾を掻ひやりな  
 がら「テ、庄太郎か、暫時父が抱いて見なかつた、此へ來や此へ何様  
 なに重くなつたか抱ッとして見やう抱こして」と言はれて庄太郎

其 四

「お内儀さん、ヤツと發見りましたよ」  
 此方へ、與四や燈函を早く「イヤお留守とならば、雨の深山降り出さ  
 ぬ中に歸るといたさうお玉どのお寝みなされ」と挨拶して二歩は  
 かり歸りかけしが、不思議さうに再び此方を顧みて「お玉殿お留守  
 居は中々骨でムるなア」と心ありげなる一言を残して「ト」  
 立ち出で、門先の邊まで行きたる頃、與四郎、漸く燈函を持ち來りて  
 「お内儀さん、ヤツと發見りましたよ」

てお呉れよ早く〜」と急ぎかくるは、尙與四郎は狼狽にながら  
 「ハイ、只今」と返事はすれど、闇黒の悲しさ、鼻先にある燈函を探り當  
 てず、ガムビシと俯ひ回つて居る折しも、表の方に人の足音、お玉は  
 愈々焦込みながら「與四や早くしてお呉れよ、誰か來たやうだから  
 と、言ふ間に早や足音は戸口の邊に止まると均しく「モウお寝みで  
 ムるかなア、まだ雨戸は引いてないやうだが」と獨語ながら障子に  
 手をかけ、ガラリと外より押明るものあるに、お玉は一層慌て込み  
 「ハイ、何方様でムりまするか、少々夫にお待ち下さいまし、只今火取  
 虫に燈火を消されました、與四や早く探して來ないかね」とイヤ  
 お内儀、庄太郎殿はお留守でムるか、「ハイ、夫は只今一寸と隣村ま  
 で與四や早く仕ないかね、マアお上り下さいまし、」イヤ御留守  
 とあらば、明日參らう、中新井の郎、開が來たとお傳へ下され「オヤ、マ  
 ア慌て腐ッて居りました、お見逃れ申しました、須藤の旦那様でム  
 りましたか、毎度モ一宿か出まして御振介に預りました、與四や燈  
 石を早く、マアお上り下さいまし、追つけ戻るでムりましたよう、マア

嬉しげに父親の傍に駆け寄りしが、ト庄太夫の枕邊に投げ出し  
ありたる草々紙に目を付け「ヤア」此御本は庄ちゃんの手早く取  
ちやんが奥四に買つたのだよ」と叫びながら手早く取つて已  
が懐に押し込み、バツと逃げ出たすに庄太や父ちゃんに今少  
て置ておくれ」と呼び止むれど、開かぬ振りして職人共が仕  
駆け行き、藍瓶の上を怖々ながらヤツと渡りて、奥四郎の傍  
は「チ、庄ちゃん、危険ふいませよ」と氣附くる奥四郎は手  
柄顔に「今阿父さんとかから御本を取返して来たの」と例の  
を振り回して見せびらかせば、奥四郎も調子を合せて「何も  
派な御本でムリなすこと、庄ちゃん其處で一々を讀むで御覽  
い奥四は仕事を仕ながら聞て居やすから」と煽り立てられて  
郎可愛らしき聲を張り上げ、右の本を差しのぞきつゝ「大岡  
が猫をつかまへる所でありまッウアハハハ、庄ちゃん、それ  
問さまではありやせん、太閤様の御家来の加藤清正と云ふ人  
を突き殺すところの書です」と教ゆれば庄太郎頭を掉りちやうじ

やないよ、虎じやないよ、コレは猫だよ」と教をこねる、斯る無  
の小供にも早やそれなりの我慢ありて、容易に己れの説を曲  
とところ又一段面白し。  
庄太夫は讀みかけし草々紙を庄太郎に取上げられ手持無沙汰に  
コロリと又横にありしが、我知らずトコロと睡り初めし頃、茶  
片手に妻の玉、いり入り来りて「モッ貴方お茶を淹れ入れまし  
たから、喚りあされぬか」と物柔らかに呼び起せば、庄太夫欠伸  
がら起き直りて「一椀買をうか」サア召上りませ」とお玉は龜裂  
湯呑に山吹色の出花を並々と注ぎて差出し、お玉は龜裂の  
ツと覗き、貴方何かあさいましたか」と云へば、庄太夫は湯呑を受  
あがら「何故」と軽く問ひ返す、何故と云ふ譯けもありませんが、何  
か今日は顔の色が「ナア」寝起の加減だらうよ、うれあらば宜  
う、いませが、何も何時もとは「云ひかけて急にか思ひ出せし  
にや、驚ちいたやうに小膝を打ち、チ、妾としたことが、トんと忘れ  
て居りました、アノ昨晚遅くあつてから中新井の旦那が、お出で

(七十) りない玉ね

のつきたる 鎧長刀 其他の飛道具 嚴しげに掛連ねたり 是なん則ち  
吉澤庄太夫が無二の親友たる 須藤斧右工門の住宅にじて 今は只  
構への高荘に昔の係を 残すのみ 土と云へば 土農と云へば 農二本  
差せ共穴勝に上下を 付けるの面倒もなく 鐵撥さしとて 笑ふ人も  
なき安樂な生活 勝手元は先づ 不如意の方なれども 家柄と舊家と  
云ふ二ツに村内の百姓を 威厭して 半分は道樂に 暮す主人の斧右  
工門多少風流の道も 辨へるをもて 俳號を 郎圓と稱しける 天性  
一片の義侠心なきに あり然れば や村人は 斧右工門と呼ばすして  
むることを なきにあらず 然れば にや 村人は 斧右工門と云ふは 心  
鬼右工門々々々々 綽名せし ほどなり 勿論此斧右工門と云ふは 心  
さまの 猛きの みならず 顔色も 至て 強らしき 方にて 常に 類の 荒  
を 延ばし 髪は 正月元日の 外櫛の 齒を 入れし ことなしと 已れの 口  
から 誇る は どの 荒武者 なりと ぞ 今しも 紺屋の 庄太夫は 使者と 共  
に 訪ね 來りし が 豫て 懸意づく の 間柄と て 玄關の 左手にある 柴  
折門を 遣入り 郎圓が 齋齋に 近き 小庭口より 飛び石傳へ 先生其方

(六十) りない玉ね

ござりました「ナニ中新井の須藤さまか」「ハイ大旦那様の方でムい  
ました」何か急ぎの用でもあつたやうか「ハイ其處の所は如何で  
いますか」庄太夫殿が留守とあらば又參ると仰しやつてお茶も上  
らすに お歸りでムりました「フム然か何のやうで出て來たか知  
らん」と思案の小首傾むくる折しも 勝手の方より 松吉と なん呼ぶ  
年期野郎が 手に一卦の書簡を持ち 來りて「旦那様 中新井の須藤さ  
んからと云つて 此手紙を持って 來やんした」と 差出すを「ナニ須藤か  
ら」と不審あがら 手簡を受取て 卦押切り「エ、何だ至急に 候じたい  
ことがあるから 此使者と同道で 來てくれろつて、ハナ何事じや知  
らん」と又少時考へ込みしが「何にしろ 聞て見ぬ中は 譯らぬ、お玉一  
ず行つて 來るから、何時もの羽織を出して 呉りやれ」  
其 五  
古木一段に 茂りたる 高地面の 中央に 茅葺ながら 際立ちて 高き 衝  
門の一構ひ 一丈に 餘る 大溝屋敷の 周圍を 繞り、丈も 及ばぬ 枳の生  
垣家の 前後を 包み、正面 玄關口を 上りて、取次の間 長押には 金紋

立てなませんければ短氣も出しませぬから何卒御遠慮なく嘔て  
 何様にこそなせぬから何卒御遠慮なく嘔て  
 来に爲て人から怨みを受けへ何様なとであらうとも決して  
 むけながら私身の上下に疑に大事先生少し待て下さいよ近  
 なと意味ありげなる斧右衛門が一大事先生少し待て下さいよ近  
 きなさいたが若し主の身に疑に付て何か變つたことはいか  
 出しは困るが心を落着てア郎が言ふことを聞きなさい開  
 らぬ一大事があ主の身に湧て来たア主が例の短氣を  
 腹を立つて呉れちやア困るが兄弟分々の好みとして何も聞捨ては  
 ながら兄弟分の約束を結んで互ひに交際を仕て居るのだが主は  
 だか遂に人間的風は違つても今日のやうに世間へこそ云はね  
 のやうに仕居るア一口に云へば變り物だ變り物と變り物  
 賣の方には女房や主人に任せきりで人の苦情や喧嘩の仲裁を商  
 たいと云ふ困つた性分も主も又立派な紺屋の主で居ながら商  
 ず百姓ともつかず傳來の赤筋を突さして肩で風を切て歩みて見

今のは又た使ひでムリましたか真平御免下されと馴々しく内に上りて開  
 書齋でムリましたか真平御免下されと馴々しく内に上りて開  
 なる一室に通れば郎開机に凭れながら左も待ち兼ねしと云はぬば  
 がりや、庄太夫殿かいかいことか待申したわへ、サアツ、と此方  
 へ、其所は何うも庭が見透せぬから氣詰りでいかぬと何時に變ら  
 ぬ郎開が待遇庄太夫殿かいか小膝を進めながら承はれば先生昨晩  
 も態々御入来下されましたらうで折あしく留守に致しまして飛  
 だ失禮を申し上げました「イヤ御挨拶で痛み入るが少々か主に用  
 事があつてお訪ね申したところと言ひかけて急に口籠りながら  
 四方を見回し、強らしき顔色を無理に柔らげ時に庄太夫殿物は話  
 て見ぬ中は分らぬが知での通り拙者も随分有はどの道樂は仕  
 し屋臺骨ばかり大さくても懐子は苦しい苦しいところだから一  
 生懸命鑄鐵を搦いで懸ければ宜いと云ふこと位は知て居るが其  
 處が先祖の遺傳だか懸懸の家風だか存せんぬ士ともあか

れし心地宜しうムります、如何なることか、庄太夫ト合点が  
 りませぬが兎に角、談話を伺つた上で、正しく庄太夫の過失なら  
 ば、言葉通り兄弟の縁を切つて戴くか、一ツ先生のお顔の潰れぬや  
 うに計らふか、一ツ、何の道此まゝには居りませぬゆへ、片時も早く  
 明し下され」と、思ひ切つて身を摺り寄せ、兩腕張つて問ひ詰むれば  
 郎閑は打鎖きいかにも只今、明し申そうと、言ひつゝ、キツと威儀  
 を改め、外でもないが、庄太夫殿、お主の女房、お玉と云ふは、大の  
 人非人、お主の常に不在勝なるを付込むで、疾より密夫を拵へ置き  
 人知らず、娯むで居ることをば、ヨモ御存じはあるまい、お玉、  
 ツ、何と仰しやります、ア、私の女房、お玉がア、密夫をこしらへて  
 た、た、たのしみ……「ア、ム」と、両手を拱ね、お玉、眞赤に爲て下俯  
 向き、キリりと奥歯を噛みしむれば、郎閑殊に落付顔、其驚きは道理  
 至極だが、是まで別に、お玉の身につき、訝を素振は、ありませなんだ  
 か、「然れば、是ぞ申すとも、氣付ませなんだが、モシ先生、然して其對  
 手は、お、お、何者でムります、ア、お主の家、子飼より勤め上げたる

下さいまし」と、口の先には、スツパリ言へども、心の中には、何事か知  
 らん彼の事の再燃か、此事の紛紜が、お記、お帳、お面を繰返せ、是ぞ  
 と、思ひ當る事もなし、郎閑は、心配、顔、イヤ、今、茲で、考へた、て、是、ば、か  
 り、は、浮、び、出、す、ま、へ、郎、閑、が、耳、へ、這、入、つ、た、の、さ、へ、漸、と、昨、日、の、事、じ、や  
 も、の、併、し、お、が、ら、庄、太、夫、殿、の、骨、肉、の、兄、弟、も、思、へ、ば、こ、そ、言、ひ、悪、い、語  
 り、悪、い、所、を、我、慢、に、我、慢、を、し、て、打、ち、明、く、る、が、事、と、次、第、に、依、て、は、強  
 念、お、が、ら、今、日、限、り、お、主、と、兄、弟、の、縁、を、切、る、の、は、愚、か、此、世、で、は、モ、ウ  
 お、主、の、面、を、マ、ア、先、生、モ、ウ、少、し、待、て、下、さい、貴、方、が、そ、れ、は、ど、に  
 仰、し、や、る、に、は、余、程、の、大、事、に、違、ひ、あ、い、が、そ、れ、は、ど、の、大、事、を、夢、に、も  
 知、す、に、居、た、と、は、瘦、せ、て、も、枯、れ、て、も、新、井、村、の、庄、太、夫、殿、其、考、は、無、駄  
 ぬ、か、ら、今、一、應、考、に、さ、し、て、下、され、イヤ、庄、太、夫、殿、其、考、は、無、駄  
 じ、や、今、拙、者、に、此、様、な、こ、と、を、言、は、れ、て、か、ら、胸、に、浮、ぶ、や、う、あ、ら  
 二、年、も、三、年、も、四、年、も、五、年、も、モ、ツ、の、前、に、も、浮、ば、ね、ば、あ、ら、ぬ、等、氣  
 の、毒、あ、が、ら、庄、太、夫、殿、兄、弟、の、縁、も、今、日、限、り、話、さ、ぬ、先、に、切、て、下、され  
 「と、二、層、言、葉、に、力、を、入、れ、て、の、郎、閑、が、一、言、に、流、石、の、庄、太、夫、も、烟、に、巻、



染職人の與四郎とやら申す奴と、言はれて、庄太夫は二度驚愕思はす、烟管を投げ出して、先生ソリヤ眞實でムリますか、あ、あ、あ、の與四郎の野郎が對手とはッ、モッ先生それをど、ど、どうして貴方がお聞き及びに爲りましたのでムリます、情願お咄あすって下せへましと郎が傍に詰り寄る容勢、今までの吉澤庄太夫にあらすして見る、中に變る血相、汝れッ一言脱む途端にッリ切る、鬚の元結を亂る、髪に玉なす汗、頬を傳へて膝に滴る。

其六

郎の斧右衛門は、無念に全身を顛しつゝ、血相替つてッリと詰り寄る庄太夫の肩を靜かに打ぎ、サア、庄太夫、其腹立は道理なれどもマア、心を落着て考へて御覽じやれ、抑も拙者が昨日此事を耳に入れたと云ふは、外でもないが、悴の斧彌奴が、何か今年の秋祭典には素人相撲を催すとかのことに付き、村の若衆共が寄合席で何所の誰が言ひ出したかは知らねと、庄太夫が女房に玉は、何も職人の與四郎と怪む中、に爲て居ると云ふ話、お出ると云ふと、成程、

に違ひがねに、第一彼の與四郎の奴が庄太郎と云ふ子供を可愛がるのが一通りでね、の、ヤレ、玉さんが與四郎一人を大事にする、ことは外の職人共と丸で違ふのと合鍵を打つ者が出来て、専らの評判であつたと、斧彌奴が戻つて来て、拙者への談話じや、併しながら人と云ふものは、兎角他人の悪事と云ふと、理も非もなく吹聴したがるものじや、ソリヤ何しても困つた風説が立たものじやかと、拙者は元より眞探堅固と信じて居る、玉さんのことをゆへ少しも疑ひは起さなかつたけれど、兎もあれ一應お主と云ふ玉さんの相談して、其様な風説の消なる工面をせねばならぬと思つたより、夜に爲てから主の宅を尋ねたところ、マア庄太夫殿、拙者の言ふことを暫時聞かしやれ、拙者が昨夜お主の宅を尋ねたところ、な、か、主の前では言ひ悪いが、マア庄太夫殿、マア、聞かしやれよ、有ふところか有まへことか、時刻を云へばまだ四ツ前であるのに、燈火も何も點いて居ぬゆへ、ハテ最ウ寝むだか知らん、それにしては、雨戸も引いてないが、無用心なことではあると、訪なひながら障子を開ひ

るは男でな、克く己れの度胸を定めて、ニッ一ツの所置をしな  
 けりや後々までのね主が名折じや、必らず腹を立てるところでな  
 いと、年は年だけ、胸を締め、郎閑が言葉に、庄太夫は初めて我に  
 返りしごとく、胸の動悸を押沈めて、成程先生の仰る通り、腹立粉  
 れにやる仕事は、後に爲て手際がわるい、世の取沙汰と云ひ、昨夜貴  
 方が御覽あされた容と云ひ、チッとも疑ふところは、ムリません、  
 今日のところは先づ何にも聞かぬ振り知らぬ振り、で宅へ歸り、内  
 々二人の奴等が、器動に氣をつけて見まじやう、ソウ、夫が宜い  
 居るは併し、先生世の中に自分の喉アが、密夫を仕たのを知らずに  
 て、其様あことがあらうとは、實に、夢にも知りませ、あんだ、サ、其  
 處が、盗人、猛々しいとやらで、貞女と見せかけ、正直者と見せかけて  
 居たのも、皆な、お主や世間の目を眩ます爲めであつたかも知れぬ  
 テ、成程然う仰しやれば、然うかも知れぬ、成程新井村の庄太夫は  
 いには、進ひないが、腹を立てなざるな、腹を、成程新井村の庄太夫は

て内を透すと何の留守どころでは、片隅の方に男と女は、  
 則ちお主の女房お玉さので、男は風説の奥四郎とやら云ふ若者、突  
 然に拙者が障子を明けたところ、おソレは、驚いたの、驚かないの  
 と云つて、實に例へやうのないほど、慌て込むで、ア、口惜いのは  
 道理だが、此のところを、克く聞きなさい、如何に物に、周章れば、とて  
 十年來、懇意にして、屈のやうなことも、往來をして、居る郎閑の、聲  
 を聞き違へると云ふこと、があるものか、成程、思ひ合すれば、晝間、俤  
 の、斧彌奴が、乃公に、話した風説、談話も、全く、猜みや嫉妬から、起つたこ  
 とでは、あるまい、何にしても、見逃しにならぬ、一大事は、持上つたわ  
 へど、心配な、おら立ち戻つたが、コレ、庄太夫殿、人の口には、戸が立  
 らぬ、此風説が、バツと、高く、あらぬ、中に、何と、か、工夫さやしら、あ  
 ては、お主ばかり、兄弟分の、郎閑まで、何も、世間に、顔向が、ならぬ、サ  
 ア、腹の立つは、道理だが、此は、必らず、腹を立てるところで、ない、と云  
 ふて、お主に、二本棒に、なれと云ふの、ではないが、爾俄かの、腹立ち粉  
 れに、裏店住居や、雲助仲間の、夫婦喧嘩、見るやうに、切たり、喉たり、す

男を磨く氣前だけあつて、女房の姦通を立派に所置したと譽められるやうに仕ねばなりません、まだくそれどころではない、お主に明せば、モツと腹の立つことがある「うりや亦先生何事をムリます」「サア是ばかりは拙者も飽まで眞實とは思はぬけれど世間では彼の庄太郎までお主の種ではない、與四郎の子ださ、言つてるそうだが、イヤモウ人の口ほど蒼蠅ものはないのふ」

其七

疑心暗鬼を生ずるの譬、怖しと思ふ心には物乾にある白地の袴、衣も幽霊に見え、淋しと思ふ心には帯の影も鬼かと疑ふ、世に君子と生れざる限りは、幾分の邪推てふものあらぬはなし、況て信するに足るべき數多の材料を他より注入せられたらぬには、乍に堅固なる鐵石の心と云へども、之に傾むくは無理ならぬこと、吉澤庄太郎とて今日が今まで女房の玉と職人の與四郎に於て斯る不行跡のあらんとは、夢にだも思はざりしが、何を云ふにも年上なり、兄弟分なり、飽まで常に信用しつゝありたる須藤郎が忠告

ゆゑ、何條疑ふ筈のあるべき、殊に此忠告とて、世の風説を土着と仕たるにはあらで、現在昨夜怪しき素振を見とめしとまで言はれては、如何に平生一家を擧げて任せ置きたる女房の身とて、豈一點の疑ひを惹起さざるの道理あらんか、已に疑ひを狭みて、疑ひの萬事ににつけて與四郎の身最負するものと、與四郎が若き男には似合し、先刻の出掛に玉が常に不興顔したることまで、一とて不審の油を添へざるは、不審の油を注ぐに随ひ憤懣の情、炎は益す、焰を強めて、五臟六腑を焦さんばかり、我ながらに支那兼ねしを、腹を立てるところでは、後の名折にならぬやう、度胸を据はて、仕置せよとの郎閑が頼めに、是も一理と無理に心を押さめて、は、見れども、郎閑が言葉を開けば、聞くは、臍立たしや、今まで大事の一粒種と、其成人を樂しみにして、口にはこそ出さぬ、寝た間も忘れしこと、のなき我子の庄太郎まで、姦夫の種と、言はれては、最う勘忍が

出来ぬ場合、折角親切に宥めて呉れる郎閑には消まされども、今と云ふ今と爲ては、譬ひ一時が半時でも時延るほご已の耻辱じや、直ぐに是から家へ返つて汝れ二人の犬畜生奴等何するか見て居やがれ、ッ、心に問ふて心に怒り、心に答へて心に焦れ、サ、郎閑の前は、両手を支に、先生、貴方の御親切は生涯忘れません、如何に兄弟分の間柄とは云ひなから、遠慮なしに打明けて下されしのみならず、後々の名折に爲らぬやう氣を付ろとの御一言、骨身に徹つて、庄太夫、屹度、貴方の御親切を反古には致しませぬ、就きましては先生、庄太夫、一ツの願ひが、ムリませぬが、情願を容しなされては下さりませぬか、改たまつて拙者への頼みとは何事か知らぬぞ、マア言ふて見なさい、年老たれど、御承知の如く、私には紺屋風情の身で、ムリませぬ、でも、ムリませぬが、御承知の如く、私には紺屋風情の身で、ムリませぬ、ば、曾て刀の嗜みが、ムリませぬ、尤も先代より傳りましたる無銘新刀が、一二本無いでも、ムリませぬが、何れも、一、最う鞘を放すこと、の出来ぬまで、錆付て到底物の役に立ちませぬ、況して本来、劍道の

心得もなき鈍腕には、姦夫姦婦の成敗は思ひも寄らず、と申して、さかに草薙鎌や茶切庖丁に、戮り殺しをするともならず、何卒格好の御慈悲を持って、先生、のれ差料の中に、て、手頃の一口御拜借を願ひ、度、ムリませぬと思ひ、決めて言へば、郎閑、何々と打笑ふて、何事かと思へば、それしきの事、郎閑、如何にも承知致したが、庄太夫殿、ソリヤ、只今でなくとも、宣かろう、克く、二人の素振を見届けた上で、ムリませぬが、先生、時と次第に依ては、其場を去らず、兩人共、ナニ又拜借に出まするが、如何で、ムリませぬ、何様、うれも道理じや、併しおがら、庄太夫殿、譬へ、人非人の女房でも、お主に白状ひろげぬ、小は、鬼もあれ、主の女房じや、お主の女房を、お主に成敗する刀物まで、此郎閑が貸たと云つては、譯を知らぬ世間の者は、何だか郎閑が、お主を煽動して、是非は先づ置き、殺して仕舞、とでも、勘めたやうで、義理が濟まぬ、殊には、又、お玉の實家なり、兄に當る、田向ひの與左工門と、て、度々の面識もある中、じや、依りて、表晴て、代、こと、は、ならぬが、今に、も、日、が、暮れたらば、拙者が、此程、新調した、コレ、此刀、じや」と、言ひながら

(一卅) りな い 玉 ね

須藤郎が門前より下新井の庄太夫が自宅までは僅か四五丁に  
足らぬ路ありとも此四五丁の間を迎る庄太夫の心は如何なり  
けん、無念とやら口惜きとやら云ふ普通の感情は通り過ぎて今は  
只姦婦姦夫を心のまゝに成敗して男の顔を立てねばならずと云  
ふ一ツの點に凝り固まりぬ憤懣に結ぶ拳を懐ろに足も空真一文  
宇に我家の門口に着きたる頃は、日も全く暮れ果てぬ庄太夫は郎  
閉に言はれし事もあれば、逸る心を無理に沈めて、咳拂ひしながら  
大戸口に至れば、玉は聲を聞付て庄太郎と共に出て迎ひ、只今  
歸りさされましたか」と何時に變らぬ機嫌顔、庄太夫も殊更に落着  
振りして内の上り思ひの外、事が抄取たゆへ何處へも回らずに  
戻つて来た野郎共は一人も見ぬが、皆あ何かしたのかと何氣な  
げに問ひかゝれど、五音の調子は何處やらに濁みぬ、玉は何の氣  
もつかず、イヤモウ若い者どて、秋祭りの大神樂の聲、古に夢中にな  
つて、今日ばかりではムリませぬ、毎日々々仕事を仕舞ふが早い  
た夕飯の膳片付けもそこくにして出て行きます」と談話がらに

りな い 玉 ね (十三)

ら手を延ばして床の間の刀掛より取下したる新味の一刀、スツ  
と鞘を拂つて庄太夫の目先へ差出し、「この刀をな、玄關脇に積む  
である胡麻売の中に隠し置くゆゑ、何時なりとも取に来るが宜い  
と云はれては、是が並々の紺屋さんなら構はぬけれど、荷にも男の  
片端と云はるゝ者が女房の姦通を成敗する刀に困つて借物を仕  
たあご、後々の笑ひ種じや、宜いか其積にさつしやれ、アレ彼處の  
處の胡麻売の中へ差込むで置かから、夜に爲て人知れず取に来な  
さい」と、最と懇ろに指示せば庄太夫は打喜び、何から何までも御注  
意、死んでも御恩は忘れませぬ、左様あらば須藤先生「最う歸らしや  
るか、又明日にもお目に懸らうが、庄太夫殿、大層髪が乱れて居るが  
其まゝで返つては「チ、トン」と忘れて居ました、安のところへでも  
行つて結はせて参りませう」と挨拶もろこくにして郎の家の立  
ち出でしは、黃暮近き頃なりけり。

其 八

行燈を引寄せ、ト夫の髪に目をつけ「是はマア和郎、た頭を何さ  
 されました、薄開がりのこと、て、少とも心付ませあんだが今朝結  
 ひ立ての髪を、是はマアと驚きながら傍に押寄り、庄太夫の顔を差  
 覗けば「ナニ此髪か、是はな今方乃公が、須藤の家を立ち出で、宅の  
 門まで来る途中、何者とも知れず乃公が後ろより突然に飛びか、  
 ッたゆへ、腰を捻つて空を拂はせ、田泥の中へ蹴込むでやつたが大  
 概其時に元結が切れたのであらうよ、それはマア危険ひところ、何  
 處も怪我はムりませなんだか「ハ、ハ、飛道具でも持て居たらば  
 知らぬこと、素手と素手の組合なら遂に一度も引けを取たこと、の  
 ない庄太夫、案じるには及ばぬわね、併しマア何處の何奴か知らん」  
 と、眞實しやかに言ひ紛らせば、ね玉は別に不審も立てず「それはマ  
 アの一語にて亂れし髪疑ひは解けぬ。  
 庄太夫は再びね玉に向ひ「與四郎の奴も今夜は太神樂の藝古に行た  
 のか「イエ、與四郎は然ではムいせん、片柳に居る親父様が病氣と  
 やらで是非與四郎に遇ひたいから、今夜一晩だけ暇を頂いて來

るやうにてどの使が参り、先刻方出掛て行きました、が、明日の朝は  
 必らず仕事の間を欠ぬやうに戻つて來ます、このことゆへ、妻一人  
 の計ひで暇をやりました「フ、片柳の親父が病氣でソリヤ何し  
 ても氣の毒なことだ、彼の野郎も今じや親一人子一人の身の上だ  
 から、萬一のことでもあつては可哀さうだなアね玉「ホ、ニ、然でム  
 います、でムいます、が和郎内の與四郎のやうな正直で堅人で克く  
 働らく職人も珍らしうムいませぬね、妻はマア彼男が居りますの  
 で片腕でムいます、よ、加之にマア今の若さで克く、の小供好きを  
 見、庄太郎は大事にして呉れませぬし、ホ、とに珍らしい人間でム  
 いますよ」と與四郎が身を賞め立てながら、膝の下に兩足投げ出し  
 て、手悪戯に餘念なき庄太郎の脊を撫り居る、常あらば庄太夫女房  
 ね玉の云ふがまゝに賞めぬまでも、額くところなれど、時時あり、  
 矢先も矢先、イザとぞんあれと狙ひを定めて待ち構へたる鐵砲先  
 に大手を開いて立ちたるお玉、例へ咽喉は貫かずとも、如何で負傷は  
 免がるべき、キリ、と逆立つ眉根の電、若物の袖口を巻ると均しく

りな い 玉 ね

其 九

腕を延ばして、無心の庄太郎をグツと引き寄する庄太郎、暫時ツツ  
 と我兒の顔、凝視あがらに聲鋭く「ね玉、こ、こりや誰の兒だ、イヤサ  
 何處の何奴が種じやツ」と、前後もなければ、語呂も應せぬ吐陸の難  
 問、ね玉は更に合點ゆかず、良人が俄かに狂氣にても爲せしにやあ  
 らんと思ひしかば、我にもあらず聲を勵まし、モシ和郎譯も知らぬ  
 庄太郎に何科あつて其様を酷いことを爲されませ、アレ、咽喉の  
 處を其様に掴みつゝけて居ては、計りたれども出奈す眞赤に爲て苦し  
 がつて居るでは、ムリませんか、可愛さうにマア、誰の子でもない其  
 兒は和郎の子でムリませ、若し息でも止つたら何なされませ、兎も  
 角も庄太郎を放して下され、お話は後で幾干も伺ひまするから」  
 胸に一点の疚しきことなく、仔細を知らぬね玉には何が何やら腑  
 に落ちぬ、庄太郎が今しも唐突に併も手荒に、罪もなき庄太郎を  
 膝下に引き付け、こ、こりや誰の子だと言ひ放ちたる一言には一  
 方ならず仰天し、兎も角も庄太郎を放して下され、お話は後で幾干も  
 伺ひまするから」

りな い 玉 ね

で幾等も妾が伺ひますから、と、繰り返しつゝ、良人の手に纏りて無  
 理に庄太郎を放さしむれば、頭是なき庄太郎、只已れが叱られるこ  
 と、思ひしにや、阿父御免なちやいよ、と、詫あがら、おじやくりして  
 お玉の肩にしかみ付く、ね玉は涙に聲を濕ませ、和郎モシ庄太郎様  
 何の腹立かは知りませぬが、此様な辨別のなき小供にあんぞ當  
 らずとも、何故妾に言ふては下さりませぬ、と、怨めしげに詰り、  
 ば、庄太郎は亂れし髪を挿り上げながら、ギラリとね玉の顔を睨む  
 で、前齒に己が唇を噛みしめ、何か思案の容子なりしが、俄かに又思  
 ひ出せしが如き作り笑ひ、アハ、ハ、ハ、ね玉、言ふて下され、あ、  
 ぬでもないが、乃公が今言ふことが和女の耳に聞か、イヤサ、此  
 庄太郎が語ることを、手前の心に分るかと云ふに、犬猫に劣つた手  
 前に物を言はうより、西も東も辨別のねに、俄鬼に言て聞かせた方  
 がまだ幾等か、優しだわね、ヤ、庄太郎、其方もモウ今日限り阿父の  
 子では、ないぞ、其方は、な、ソ、其處に居る四ツ足の子じや、ア、傍に居  
 るのも汚ら、は、しいわね、と、高聲放て罵るにぞ、ね玉も今は堪に切す

思はずツツと泣き出せば、庄太郎も共に悲くなりけん。おろく、聲を張り上げて、「阿父ちゃん、庄ちゃん、阿母ちゃんが悪いのだから勘忍しててくれよ。是から屹度悪戯ぢないから、アレ阿母ちゃんが泣いて居るよ。奥四が居れば宜いなア。奥四が」と、無心に言ふを、庄太郎又も聞き答め、「コレ庄太郎、手前は阿父ちゃん、奥四と何方が好いと、態に柔しく問ひ詰れば、阿父ちゃん怒つたから嫌や、奥四怒らないから好い子だよ。」と、片言ながらに答ふる幼兒、是さへ矢張り庄太郎が胸の焔を強める薪、見ることも聞くことも、類に障つて、脾肉も骨と放れんばかり思はずツツと身顫ひして、泣き伏す。玉の頭をば左の足にハツメと蹴る。譯も聞せず、にそりや和郎ツツと泣き聲あがら起き上るを透さず、又も庄太郎、手に持ち居たる煙管もて、ビツと云ふは、おれ玉の横面二ツ三ツ、お玉はヒと悲鳴を上げて、「如何は、此身に悪いことのあるかは知らねど、理非も言はず打擲するとは、ツツ八ヶ間敷わね、それほど譯を聞きたくば、汝が胸に開て見をれ」と云ひ、さまた煙管振り上げ、所嫌はず打ちかゝるを、幼心にも、庄太郎、見兼で中

に躍り込み、父の小脇に纏りつ、「コレ阿父ちゃん、阿母ちゃんが悪いのだから勘忍してくん。ちゃん、阿母ちゃん、やん、其處に居ると又阿父ちゃんに打たれるから、早く逃げないぢやいよ。」と、止むるは、おれ玉、眼を怒らして、睨みすゆれば、アレ怖いよ。」と、叫びながら、今度は泣き入る。母の膝に取付き、阿母ちゃん、顔を上げ、亂れし前を繕ひつ、「ハラ」と降る熱涙を拭ひもやらず、片手にヒシと抱きしむれば、庄太郎は「一層悲しき聲張り上げ、アレ阿母ちゃん、顔から鮮血が出て、よ。」と言ふに、おれ玉は又驚愕、手もて静かに打たれし頬を撫で探れば、ホタリと滴る、我子の額、利發なれども、女心を、血を見るより、赫々と逆上げ、兩眼、忽ち眩み來りて、覺えず、我子を取放しぬ、取落されし、庄太郎、一時はハツと魂消しかども、子供心のいたいけさ、直ぐに又起き直りて、母の膝に匍ひあがりつ、「阿母ちゃん、鮮血痛いかへ、坊がいき直りて、母の膝に匍ひあがてあげるから泣きやないよ。」と、譯は知らねど、親子の情、一生懸



命に勵りくれる我子の言葉に玉はホツと我に返り更に容を改  
 めて其人の前に手を支え、モシ庄太夫殿、妾に罪のあることあら例  
 へ此ま、賜り殺しにせられても、夢更お怨みは申しませぬほかに  
 お腹立の顛末を只ツた一言聞かせて下され、それ聞せて下さらぬ  
 中は死でも此處は動きませぬ、縦しや又妾の身に何様な悪い過失  
 があつよにもせよ、去られぬ中は矢張和郎の女房でムりまず、其現  
 在の女房を去るならば去るだけの譯、殺すあら殺すだけの譯、只の  
 一言も聞せぬと云ふは無禮ながら日頃の和郎にも似合ざる爲さ  
 れ方、六年餘りの年月連れ添ひ申しても遂に一度た言葉返した  
 覺はのな、妾あれと、今日と云ふ今日ばかりは何あつても此玉が  
 申すこと叶へて下され、コレ庄太夫殿、左もあい中は例へッ、此  
 場で和郎の手に加ゝるまでも決して後へは退りませぬと、覺悟  
 決めしお玉の容子に庄太夫も恥度思案を定め、それはさまで聞た  
 いあら、兎もあれ長年連れ添ふて居た夫婦の眞利、只ツた一言聽せ  
 てやろう、外でもねねがコレお玉、和女や内の奉公人、與四の野郎と

何時の頃かは知らぬに、克くも、巫山戯た真似を仕やがつて、乃  
 公の面に泥を塗たなア、イヤサ、今更驚く場合じやあるめね、確かあ  
 証據が上ッて居るのだ。

其事十

事もあるうに、姦通、女の身には此上もあき恥とも不貞探さも、豈ひ  
 やうあき姦通、狂ひに口を暮せしと言はれては、乍らに佛のやうあ  
 る婦人ありとも、其まゝに口をつぐむる筈はあらじ、況して世の常  
 に優れて堅固なる貞女の玉、餘りの事に聲も出さず、我を忘れて長  
 人の顔を凝視し、まゝ、腰き来る涙止めかねし、が、漸く胸を撫で下ろ  
 して、モシ庄太夫殿、先々からの容子と云ひ言葉振り、と云ひ、如何に  
 も台照の行かぬことばかり、揚句の果には邪儉にも妾の髪を足に  
 かけ、まだ飽き足らで煙管の折、瀉と此身が彼の與四郎と其様な  
 こと、のあつたものあら、土足や管煙は愚かなこと、モウ、何のやう  
 あ酷に遇されても、夢更お怨みは申しませぬが、遂ひに一度口小言  
 さへ言はしやんしたことのあい和郎、此やうに怒りなさは、余程

ろに伏し轉びぬ庄太夫は言葉をつまみ、コレか玉、何れも驚愕すること  
アねに宜い後は悪いの壁へ、長の年月此庄太夫の鼻毛を讀むで己  
か勝手道樂を仕たのだから斯く露はれた上からは未練らしい  
事は言はずと如何にも姦夫いたしましたと白状ひろげて仕舞ふ  
が宜い兎にも角にも手前だつて新井村の庄太夫が女房じやねに  
かど苦笑ひしつゝ、説諭せば、玉は口惜さ無念さに、謂ひたきこと  
も口に出す、只キリと齒を咬ひしり身を顔はして右つ左つ、其  
に泣き居る庄太郎を憐れ抱きしめ抱きしめて、怨めしさうに良人  
の顔を見る目の物凄さ、庄太夫も小氣味悪くは思へども此期に  
及びて弱味を見する譯にもならず、殊更急に落着顔、コレも玉、何  
其様おに口惜いのだ、泥棒にも三分の理があるや、乃公に謝ら  
り、擲かれたりしたのが、残念か、身から出た錆で仕方ねと諦ら  
めろ、併も昨夕の今頃、須藤の且那がムツたさき何故燈火も何  
ねに眞暗闇に與四の野郎と二人して寐轉んで居たか、巫山戯て居  
たか知らねに、且那の足音に嗅驚して如何に慌てくさればとて

確かな証據があつての上で、ムリましやう、サア其証據を言つて下  
され、何様な証據かは知らぬけれど、妾に於ては其様な不行跡と  
金輪際覺はムリませぬと、流石女中の口惜粉れ、疊叩いて泣口説け  
ば、庄太夫左なきだに血走りたる眼中に、一層凄き電を光らせ、白痴  
女ッ、三千世界を尋ねたどて、ハイ妾が姦夫を致しましたと、自分  
口からぬかす馬鹿があるものか、今更に爲て分疎をするは野暴の  
骨頂、乃公も又手前のやうな犬畜生に物を言ふだけ泥の上塗男の  
汚れた証據詮議は止めしろ、イヤ、  
言はれても証據のないことは承知出来ませぬ、殊に和郎は確かな  
証據があつてあると言はさんしたからは、定めし立派な証據を持  
て、あらう、サア其証據を見せて下され見せて下され、無氣に爲  
て取組れば、庄太夫は蒼蠅に玉の身軀を突き除けながら、今ま  
でに百陪優さる腹立聲、証據と云ふは外でもねに、此庄太夫が兄分  
の須藤郎閑様だ、イヤサ生て居る証據だから、是より立派な者はあ  
るめへ」と、泣みなく言ひ放せば、玉はヒエーと驚愕して、思はず後

「子、如何ある願ひかは知らねど、高の知れたる和女の望み許して  
 やらう、開届けてやらう」と思ひ切たる庄太夫が返答、た玉は莞爾笑  
 ひを含んで、其様なら庄太夫殿、此身の願ひを聞て下されませうか」と  
 念を押せば、諄いわへ、庄太夫は男だ、子、有難ふムりませう、外のこと  
 でもムりませぬが、和郎にも知ての通り、妾の身には天にも地にも  
 替はがたき、只つた一人の母様と、一人の兄がムります、路程とても  
 五丁とは距てぬ、田向ひ坪、外おがら一生の暇乞が仕て参りたうム  
 ります、必らず逃げも隠れも致しませぬほどに、長ふて半時か一時  
 の暇、何卒許して下さりませ、願ひと申すは此事、ムります」と言  
 ひつゝ、良人の顔を打仰ぐ、眼には無量の怨みの涙、庄太夫は嘲笑ひ  
 「犬猫にも劣つたる和女のやうな悪魔でも、阿母や兄弟が戀しいと

其十一

猿しい契りを結びました、森夫したに相違ムりませぬ、美事御存分  
 に仕て下さりませ、然りながら庄太夫殿、此玉が一生の願ひを只ッ  
 た一ッ許しては下さりませぬか」

三日にあげず遊びにムる且那の聲まで聞き違ひて、お茶も上げず  
 にか返し申し、まだ其上に今日の晝間、乃公が須藤へ行かうとする  
 時も仔細もぬに、濫々顔、それも是も皆な乃公の眼鏡が進つたの  
 だ、から人を怨むじやア、ぬねけれども、昨日が昨夕まで、内の喉アは  
 感心でムります、人の賞める調子に乗て共に和女を賞めて居た  
 のが、今更にあれば口惜いとも残念とも、此腸が蒸にくりけへるわ  
 ッ、ムッこゝ畜生女奴がッと言ひつゝ、又もた玉の顔を拳を固めて  
 擲り飛ばせば、お玉は勿論、庄太郎も共に聲揚げ、溢き出せ、片田舎  
 の離れ家とて助けに來る人もなし、お玉はやがて胸を据え、泣き疲  
 れに、疲れたる我子を、縋と疊に下し、袖に涙を押拭ふて、「モッ、庄太夫  
 殿、日頭からの和郎の氣質、殊には外おらぬ、郎聞様、が証、人とおら  
 ば、申したいことも山々あれど、言へば言ふほど身の分疎となるの  
 みか、却つて和郎に腹立てさするやうなもの、モウ何にも言ひませ  
 ん、はどに御存分に、して下され、如何にも妾は和郎の察し通り、道も  
 らぬことと知りながら、フとした心の迷ひより彼の與四郎と淺

見にて、暇乞ひを仕てへと云ふ心の起るのはしほらしいことだ、許しがたい願ひあれど、其しほらしい心に免じて、一時の暇を呉れてやるから、思ふ存分に暇乞ひを仕て来るが宜い」と口には恩を被すれども、心の中には先刻方須藤郎と約したる刀の都合あれば、り、れ玉は已に覺悟の前、犬と笑はれ猫と罵られても、口惜き素振は表に見せず、手早に髪を撫で上げてウット／＼睡る。庄太郎を抱き起し漸く已が背に負ひ、左様ならば庄太郎殿、一寸と行て参ります」と立ち上つては見たれども、思はず知らず踏躰元、キツと踏みしめ、坪、已が裾にハク／＼と散すも、哀れ露の玉々とは無情の影か身か、但しは果敢なく散る迷語か、微塵覺いのなき科に死なねばならぬ、今日今宵寧ろ夫の手を待たず淵川へなと身を投げて、イヤ／＼それで夫に約したる言葉に背き不貞に不貞を重ねるばかりか、庄太郎が妻のれ玉は姦夫をした面目なきに淵川に身を投げたと云はれ、ては、世間の人の疑ひを、我から好むで増さする道理、まゝよ女の身

ながらも一旦斯うと決めし覺悟、今更に爲て崩折れるは後々までの笑ひ草、母上と兄様に暇乞ひを仕た後に、庄太郎が身の上を精しく頼むた其上で、潔よく新井に歸り、美事夫の手には果なば、壁ひ此身が亡き後でも、何時かは一度夫の疑心、サッパリ晴るゝ時もあるべしと、我と我身を勵ませ、子供心の庄太郎、今宵限りの母が背にスヤ／＼睡るいぢらしさを、見ては流石に女の愚痴、又も命の惜まれて堰き来る涙胸一杯、我を忘れて稍少時、恍惚佇む月影も心の迷ひかれば、ろげに、死出を急ぐや、蟋蟀鳴音もいとゞ、網に、田の而を渡る夜半嵐、肌を染みて、庄太郎惜き夢をや破りけん、突然ワツと聲を放つに、れ玉は吃驚氣を取直し、庄太郎や、阿母ちやんだよ、阿母ちやんに背負して居るのだから、おのこではありませんと、賑しながらに身を垂り、涙のみこみ／＼つ、聲も哀れに守諾の節も亂るゝ後や先、れ玉さま、い／＼つ十三七ツと、誑へばあななき庄太郎、眞綿の如き柔しき手に空の月を指しながら、寝惚聲を張り上げて、まアだど、しやア、わか、いと、回らぬ舌に後を纏ぐ、れ玉は之を聞よりも、身軀の

節々碎くる思ひ、シツと袂を噛みしめて、子には知らさぬ忍び付き  
「是はマア庄ちゃんの上手に為たこと、誰に教ばって其様な上手  
になりまししたと、問はれて存の庄太郎褒めらるゝが嬉しさに誰で  
もあゝ、與四に教はったのだ」と言ひかくるを、お玉は「これッ」と打消  
て、又もハマと歩み止め「コレ庄太郎や、此阿母ちゃんのは、今夜阿父  
さまにお叱りを受け、追ひ出されて仕舞たのだから、モウお宅へ歸  
ることも出来ません、是から田向ひのね婆様のところへ行くのじ  
やけれど、殊に依るとの、庄ちゃんだけは明日か明後日にあれば  
宅へ返るやうになるかも知れぬが、モッ然云ふことに為たらばの  
必らず、阿父さまの前で、與四郎の事を善いことでも悪いこと  
も、其方の口から言ひ出してはなりません、譯りましたか、それを  
言ひ出すとな、又今夜のやうに阿父さまに叱られますぞ、コレ庄太  
郎や、今阿母ちゃんと言つたことが坊の胸に落ましたか、イ、エ  
うれでも坊は與四郎が好きだもの、アッコレ、幾干好きでも、其を  
言ふと、直きに又阿父さまに打つたり搦かれたりしますから、決し

て與四の與の存でも言ふのではありませんぞ、宜いか譯りました  
か、チ、是は又妾にばかり物を言はせて、睡て仕舞つたさうな、エッ  
小兒は正直なものではある、ドリや徐々々で行きましやうかと、力な  
げに獨語さつ、渡る小川の板子橋、汀に茂る篠陰に母子の影はか  
くれける。  
此方は吉澤庄太郎、お玉の出るを待ち兼ねて仕度もそこ、立ち上り  
尻引寒げて既足のま、中新井に駆け行きて、郎方の方の玄關先、積重  
ねたる胡麻売を彼方此方を掻き分ければ、案に違はず彼の一刀、密  
と引き出し鞘を拂つて月の光りに二振り三振り、鐙の元より尖先  
まで眩度見上る怒りの眼中、殺氣は溢ふれて大寛の如し。  
其 十二  
遇は別れの始めと云へど、人の此世に生れ来て、悲しきもの、極ま  
りは別れと云ふ字に越すものあらじ、別きて一世の縁と云ふ親  
子の生別れに増す憂きは三千世界にあきぞがし、扱てもお玉は庄  
太郎を脊負ひながらに果敢なくも、逆り若きぬる實家の門口、態と

可愛らしき一段に爲て来た」と、獨りそやく喜びしが、不圖玉の  
常に変りて打萎れたる姿に氣付き、俄かに思ひ出したる如く霜降  
る髪を掻き上げながら、玉の面をツツと凝視し、ホーンに「私と  
したことが、久振りで孫の顔を見た嬉しまさぜ、何も彼も忘れて居  
たが、和女は今夜何しに來やツたのじゃ」と問はれて、玉は我知ら  
ず「ハイッ」と口まで出でしが、後は涙に胸迫り、包まんとするほ  
ろ、堰せ上げ、苦しき壁へんやうはなけれど、顔に涙の數知れぬ老母の  
顔を見るに、付、愈よそれと明しかね、無理に嘘に粉らして、膝を枕に  
寝かしたる我子の背をさすりつゝ、蘇ろく胸を押沈め、ナニ阿母さ  
ん、是と申す要事があつて参つたのでは、ムリませぬが、今夜は珍ら  
しく宵の間から庄太夫殿が在宅であつたゆへ、盆以來、いかい御  
無沙汰をいたしましたから、それで上つたので、ムリですが、折角お  
寝みのところをお起し申して、と、洵としやかに言へば、老母は流石  
に、虚とも思はず直ぐに眉根の皺を開きて、「チ、然うであつたか、私  
は丁度今夜は何の加減か知らぬが、盆の中に入つたは、這入たけれ

涙を押し包み、「モウお寝みでムリますか」と、聲かけながら「と  
慄ふ手先に、雨戸を叩けば、内には、玉の老母と思しく、寢覺に、  
皺、枯聲、「ゴホン」と、眩拂ひしあがら、誰方で、ムリますか、今晩は、モウ  
臥せりましたから」と、我子と知らねば、言葉も殊に、叮嚀に、断り言ふ  
を、玉は、開付け、然う仰しやるは、母様では、ムリませぬか、吉澤の玉  
で、ムリます」と、押返されて、内ある老母は、左も驚ろきたる、頓狂聲、チ  
、娘のお玉であつたか、已りや、又今時分、何處の人が、と思ふた、今  
明けてやります、ドレ、何事か、又急な用でも、出來たのか」と、眩さ  
がら、盆を出で、曲れる腰を、摩りあがら、枕邊の、殘燈を、挑き立て、靜か  
に、戸口に、歩み寄り、老の手先に、力を、込め、鍵漸と、取外して、「サア、  
方へ、這入るが、宜い、コレ、ハマア、孫も、脊負つて、來やつたのか」と、喜ば  
しげに、お玉の手を取り、已が、臥戸と、定まれる一室の中、に、引き入れ  
て、何より、先に、孫の顔、幾度となく、凝視し、チ、く、克く、熟睡して居ると  
と、わい、ホーンに、小兒と、云ふものは、半月も、見あいで、居ると、滅切、大さ  
くなるもの、じや、なア、頬の、邊から、頭へ、かけ、ホッ、ナリと、肉がついて

つた白糸をば足に踏みかけて、それはモウ屑々にして仕舞ひまし  
たから、一生懸命に緒を探して、棒にかけをしました、それから  
少し目の中が痛みまして、時々涙がこぼれますので、ムリですと口  
には、曰へど心の奥知らぬ佛の母親も、何やら疑心の晴れぬ面色、  
ヤ娘、先の短かい一人の母に、餘計な心配をさせまじと思ふ孝心か  
ら、和女はかくして居るのであらうが、マア物の道理を考ても見や  
れ、如何に庄太夫殿か珍らしく在宅じやと云ふて、他に手のない家  
ではあるまじ、夜夜中に生若い女、獨に小兒を養つて、醫へ四丁五  
丁に足らぬ道程じやとて、助家と違ふ田甫路、庄太夫殿が平生の氣  
性でよこされる筈はない、まだそれのみか、頬の疵、鬚の乱れ、松毛に  
溢ふる涙と云ひ、かすみ果てたる阿母の眼にも、とまつて居る、是に  
は何ぞ譚のあることと疾に察しては居たれども、態と和女に尋ね  
たのじや、何の他人が居るではなし、生の母親に打明すのじや、  
かしいことも可笑しいことも何もない、サア安心の爲めに話して  
りやれイヤ、一息和女がかくしやるだけ、却て私の心配が増す、サ

ぞイヤモウ睡むられのふて、身軀一ツに持て、餘して居たところ  
ゆへ、其心配に及ばぬわへど、莞爾ながら行燈の火影に、チラと  
玉の微疵に眼を付け、コレ娘、和女は頬のどこを何か仕やつたの  
か、と不意に問はれて、玉はギョッリ、ハイ、是でムリますか、是は彼  
の今ッ、オ、ソレ、彼の源作殿の洲子島、此方のどこで、チヨッ  
と石に躓きまして、それはマア危ないこと、外に何所も怪我はな  
つたか、と、何にも知らず喜ぶ母親と、我子の寝顔、右左、見るも今夜  
が限りぞと思へば、又も胸一杯血をも吐きたき切なさ、をシツと遣  
はて居たりしかど、自づと知る、松毛の露、老眼あがら母は目に止  
め、又も不審の曇り、襟、コレ娘、年寄と云ふものは、克く口八ヶ釜敷と  
とばかり云ふものと思やるか知らぬと、私は何も何とのふ和女の  
容子が氣に爲て堪はられぬ、殊に見れば、和女の眼中、涙が一、杯に溢  
つて居るやうながと、言ひつゝ、傍に詰りやれ、玉は無理に高笑  
ひ、オホ、阿母さんとしたこと、が、うりやれ、心の迷ひと云ふもの  
で、ムリまじやう、尤も先刻方、庄の坊主女、か他から熱によこしてあ

りあい玉水 (二十五)

テ何云ふ辭けじや、何の仔細じや、よもや世間に有りふれたる夫婦  
喧嘩ではあるまいのふと進退ならぬ母の間に玉は熟々思案の  
休寧ろ仔細を打明けて立派に別れを告げて行かうかイヤ、此で  
打明あは必らず我身のいとさきに到底放して歸し給はじ、殊には  
只ッた一時と堅く約せし夫の前逃びかくれでも仕たやうに思は  
れては倒へ生て居ればとて、かゝる疑心は暮るばかりと云ふて後  
で母さまが我娘と姦通せし爲めに夫の手にて殺されしと聞き玉  
は、其れ歎きは幾干と云ふて茲で明しなば、年は辛なり女の子  
とては我身の外になき母様、心も狂はしくなり玉ふて共に死なん  
と歎き伏し玉はん、その傷はしき有様を現在子として目に見なが  
ら、如何に如何なる道めりとして、心を鬼に振り切て歸ると云ふは堅  
きこと、ア、何したら宜からうか、寧ろ茲まで來ぬ中に死んだが優  
しであつたるかど、少時途方に暮れながら膝に眠れる我兒の愛顔  
見まじとすれば母の愁顔、ハッと思はず眼を閉づれば、ア、怖ろし  
や、良人の怒顔、そこに明々現はれて、今や運しと刀を右手に。

(三十五) りない玉水

其十三  
れ玉はッと身を顛はし、老母の前に平伏てヨ、とばかりに泣き  
沈む、老母は愈よ不審だら、コレ娘、如何に和女がかくしやッても  
私が目には見えてある、サア仔細を話して聞かせてくれ、左もあ  
内は寐かしもせねば私も寝ぬ、サア早く言ふてたも、と、殿しく問ふ  
も親の慈悲、仇粗畧には思はねど、うれを結ばれぬ丸指の髪も亂れ  
て振りかゝる涙の雨や玉笹、襦袢の袖に拭ひつゝ、モ、阿母さま、御  
心切なるを尋ねも我子が可愛と思せばこそ、必らず仇には存じま  
せぬ、詢このことは阿母さま、此身に如何ある罪があつてかは知り  
ませぬが、今日の夕刻、良人、庄太夫殿が中新井の須藤様から使ひ  
が参り、そのお使ひと一所に出で行かしたんして用をすまし、先刻  
方内へ戻つて妾の顔を見るや否や、譯も言はずに打つたり蹴たり  
何にも知らぬ此庄太郎にまで、打當つての腹立ゆゑ、何したわけと  
問ひ返せ、只氣に喰ぬ出て失せろとばかりにて、譯も仔細も言ひ  
玉はぬより、詮方つきて此子を連れ、兄さんや阿母にも篤くりと相



談をした上で、明日の朝にでも成たらば、幾干か庄太夫殿の怒りの  
心も鎮まるで、ムリませうから其時を待て、阿母なり兄様なりに一  
所に、行て頂かふと思ひまして、それで尋ね申したので、ムリませ  
うと半ば眞實、半ば嘘、只々老母の心休めを專一に其場逃れの身の上  
話、老母は初めて打領き、何のそれしきのことならば、早く私に話せ  
ば宜いに、夫婦喧嘩と云ふものは何處の世界にも幾干もあること  
宜いとも、必らず心配するには當らぬわね、明日の朝に爲たらば  
兄の與左衛門に連れさしてやりますから、今夜はモウ寝たが宜い  
然りながら、娘庄太夫殿が其中新井から戻つて、ムツた時には酒に  
でも酔つて、ムツたか「イヤモウ酔つて居たの居ないので、ムリませぬ  
丸で手にも足にも懸らぬ位、チ、然であらう、酒にでも酔なくて  
其様な分らぬことを爲る婿殿じゃあ、其様なならば、尙更のこと  
じや、明日の朝にさへなれば、夢のやうに忘れて仕舞から、少しも心  
配するには及ばぬわ、和女は兎もあれ、此様な可愛い小兒まであ  
る交情じやもの、縦しや和女に、少とやう、この過失があつたにせ



(五十五) り な い 玉 水

よ、離縁をするの打き出すのと、つまらぬ剛情を云はるゝ、婿殿じや  
ない、ア、うれ聞て漸と此胸がをさまつた」と、喜ぶ顔を見詰むるに  
玉、心の中に合掌して共に表面は笑ひ顔、正直一遍の阿母ゆへ、モレ  
此様なことを打明たら例へ夫が如何なる無理を言へばとて、妻の  
方から出て来るのは女の道に反くさど、きついたら叱りを受やう  
かと思つて遂ひたかくし申しました、が仔細と云ふは全く右の  
で、ムリますから、御安心なされて下さりませ、うれはさうと阿母さ  
ま、兄様は今夜何あされました」と、何氣なく問ひかくれば、チ、兄の  
與左衛門は、和女も兼て知て居る、榎本の庄屋殿の息子さんが嫁を  
買ふにつき、今夜其婚禮があるので夫婦して御祝儀に行きをつた  
が、何せ歸りは夜明けごろにあるであらうから、萬事はア明日の朝  
のことで、して今夜はモウ寝むとしましやう」と、言はれては玉心に  
は折悪かりしと思へども、又今更に詮なれば、ア、左様でムリま  
したか、其様ななら兎も角も、今宵一晩御振介になりましやう、何  
の御振介のことがあらう、私は久振で孫を抱ひて寝ますはどに

和女面倒でも其押入から夜具を出して勝手なところへ寝みやれ  
しと言ひつゝ老母は孫を抱へて衾に入りしが玉は是も母様と我  
兒の顔の見納めと思へば流石女氣の又も涙は胸一杯滯漏さじと  
衣服の袖緊乎と前齒に噛みしめて豫て容子も白紙に視箱を取  
し先立つか詫び我兒の未兄宛てたる文書は此身に代つて年老  
りし一人の母に孝行をつくすにかたき筆の先親子の縁も薄墨に  
サラくど書く二通の文堅く封して行燈の蓋につきたる抽斗の中  
に收めて取片付母と我兒の寝顔をば幾度となく差のすきモウお  
去らばも口の中。  
微かに響く遠寺の鐘指使れば早や九ツ良人に約せし一時の時刻  
となりぬモシ母様不孝の詫は未來にて恥度申し上すから庄  
太郎が行末を何卒頼み申しますと心の中に探り返し心を鬼に  
立ち上りフツと行燈を吹き消して顔見ぬだけが責めての諦め二  
人の夢を覺さぬやう静かに雨戸探り明けて庭面を見れば一輪の  
月は漸く傾むきて千草に咽く虫の音も哀れを添ふる秋の夜半お

其十四

玉はキツと覺悟を据へ思ひ切て外に一步踏み出しながらバツ  
リと閉づる雨戸は鐵の關ならぬども二度と又明るにかたき落し  
錠未練と我を勵まして拾ふ足元恩愛の縁に又も引戻され思はず  
知らず戸に添へば内には母と我兒の寢息道にも泣ぬ悲さを又踏  
み切て門邊まで歩み出れば青柳の糸も乱れて後髪引き戻されじ  
と堪ゆれど道度は母の皺枯聲か玉モウ睡りやツたか」と氣付ふ聲  
の聞ゆるに南無三母に知られじと我身を縮めて物の蔭ア、彼れ  
が母様の声の聞納めじや庄太郎は目が覺ぬか希ふことなら日  
を覺して只ツた一聲阿母ちやんようと呼むでたも母は返事は出  
来ぬども死に行く身の儼別に其方の聲が聞たい」と念する親の心  
根も白川夜船只スヤ〜。

名残は盡じ、モウ是までと心を決し、母と我兒を振りすて、足さへ甬  
に返り来れば、良人は内に大胡座、今や返しと待ち構へぬ、玉はッ  
ツとも怯れず、大戸口より内に入り、平素に變らぬ顔の色、言葉の振

りも最と柔さしく「庄太夫殿、今戻りました」と、挨拶すれど庄太夫は返事もなく、宛ながら大山の動くが如く、床踏み鳴らして、お玉の傍に歩み寄り、お玉を「玉観念」と言ふより早くスラリと刀の鞘を拂つて目先へキツと突きつければ、お玉は慌て、後に飛び退き、金切聲を張り上げて「アレッ庄太夫殿、マア少し待て下され」と叫びながらに、良人の手首へ紐り付けば、庄太夫は聲荒らげ「汝れ此期に及んで怯れをツたか」と、お玉の顔を睨まへつくれば、お玉は頭を左右に振り「イヤ」庄太夫殿此場に爲て怯れたかとはお情けない、其程まで心弱きお玉ならば、何でオメ、此家へ戻って参りまじやう、美事と和郎の手にかゝつて果てまじやうほどに、今少時の間待て下され、兎角婦人と云ふものは身の嗜みが大切とやら、假令和郎の手にかゝつて死ぬまでも、コレ此様に髪を乱して斃れては死ゆく妻は鬼まれ角まれ、後に残らしやんす和郎の恥辱になりまじやうほどに、此乱れ髪梳き上げて結び直す其間、何卒刀を収めて下され」と、理の當然に詮方なく、庄太夫は不精々々、それほどの望みなら許してもや

らうければ、暇とつて居る中夜が明るはつと、言ひつゝお玉を撫き放せば、お玉は左もく嬉しげに土間の小隅に横はる砧石に身を寄せせかけ、手早に髪を解きほそき、有合ふ水に櫛の齒を濡めして梳る黒髪や胸は千筋の乱れ髪、かみも佛もなき世と、口惜涙に日は眩み、手先は顔ふばかりにて、我にもあらず、お玉は待ち兼ね、自駄々踏むで土間に飛び下り、お玉の帯際ムツと捉めば、お玉は驚きたぢろざつ、庄太夫殿、モウチツとの間でムんすほどに、髪を根元を握りしまゝ、良人の腕に取組れば、エッ小癩な犬畜生、散々人を待たした上、又も目先で乃公が氣を引かん術みか知らぬさも、ヤレ嗜みの恥辱のど、他まで乃公を罵り居るか、眞人間なら知らぬこと、犬畜生の成敗に、後の恥辱も婦人の嗜みも無用ぬことだ、考へれば考へるほど、業の煮ゆる汝れが舉動モウ勘忍がならぬわへ」と血走る眼逆立つ髪、汝れと言ひさま振りかざす白刃の下に、女房のお玉、兩手を合せて涙聲そりや、餘りじや、庄太夫殿、言ひ出しては聞かしやんせぬ和郎の氣質と知たゆへ、只た一言の怨みも言はず、潔

(一十六) りなしい玉れ

に無残や玉の指先、ザツリ切れて血はボク、氣丈の玉も痛  
みに堪へ兼ね、悲鳴を放て怨めしげに良人の顔を疑視る、瞳の物凄  
く、咽喉の調子も狂ひけん、俄かに變る聲、音の色、コレ庄太夫殿、克  
くも、コレ玉が髪を揃へる指先まで切り落しては下さんしたな  
ア、モウ此上は望みも絶た、何處からなりと切つて下されと、言ふさ  
へ最早片息吐息肩と手先に溢る、血は土間一面に漂よふて土に  
半ばを埋めたる砧の石も浮ばんばかり、烈火の如く猛りたる流石  
剛氣の庄太夫も、此惨状に避易して、須臾はチツと瞬きもせず玉  
の姿を見詰りしかど、斯ては果てじと氣を勵まし、又も刀を取直し  
眞向目がけて斬りつくれば、不思議や玉は身を沈めて、良人の兩  
手を構しと押へ、モン庄太夫殿、冤の罪で殺される妾身は元より覺  
悟の上とは云ふもの、何にも知らぬ與四郎ばかりは何卒容して  
やつて下され、此吉澤の家に取り功こそあれ過失もなく正直堅固  
に勤め上げたる彼の與四郎が命まで取らしやんずは、そりや和郎  
和郎りや餘まりでムらうがな。

りなしい玉れ (十六)

よくお手にかゝつて果てんと覺悟して居るものを、今まで待て此  
場になり、如何に妾が惜いかは知らぬと、髪を揃へる其暇、待て下  
さるゝとが出来ませぬか」と、口説は尙も庄太夫聞たくもねへ迷語  
怨むなら怨みやがれ、追つけ對手の與四郎も冥土の旅へ追ひやる  
から、闇魔の廳でも、劔の山でも、但しは奈落の地底でも、勝手次第に  
痴々、縁合へ、聲を聴くのも面見るのも嫌で、堪へられぬわへ、なま  
じひ手向ひしやがると一寸切に仕てやるぞと、怒鳴りながらにお  
玉の肩先、ヤツと云ふは斬り付ければ、サツと迷する血汐の紅、コリ  
ヤモウ妾を斬らしやつたなア、サ、斬たが何とされた」と、言ひさま  
も振り上る右手にお玉はしがみつぎ、マ、コレ庄太夫殿、何故髪を  
揃へさしては、く、下されぬぞ、鬼ても角ても死る身に洒落ひろい  
で何とする、うれはさ髪が揃へたくば、絶息た後でも揃へてやら  
早く往生して仕まへ、いやじゃ、例へ何と云はれても髪を揃へて  
仕舞はぬ中は妾ア死ぬのがいやじゃ」と、若しき息を吐きながら白  
及の真中引つ掴めば、庄太夫は力の限り、グツと一息引き下る途端

縁を絶つて下さればよし、左もない中は此怨み、いッかな、晴ぬ、晴さ  
れぬッ」と言ひつゝ、又も庄太夫の膝にとりつき起上らんと身を燥  
る。克くも、  
くも地獄の底で閻魔様に篤り相談を仕てうせをれ」と言ふより早  
く、鋭き尖先、骨も通れと脇腹の邊、グサと立つれば、手負のお玉最  
早逆らう力もなく、エッ口惜いと只一言、口まで出せしが此世の名  
残、敢なく息は絶へしかど、怨みを含む兩眼は生るかどとく啼きて  
虚空をつかむ兩の手は、無念の拳を固めしまゝ、血に染まりたる顔  
色は、視る／＼中に蒼白めて先刻方まで我兒をば罷して居たる唇も  
今は冷たく、紫色、庄太夫は足もて死骸を押片付、刀の血を拭き去て  
靴に收めてホッど一息、馴れぬ仕事とは云ひながら滅法界に骨が  
折れたと、眩きながら爐邊に行き、土瓶の口よりドッ／＼と息をも繼  
かず水飽み吞し、ア、是で少しア胸の動悸は収まつたが収まらぬ  
は野郎の處置、合惜今夜は内にア居す片柳まで踏み出して行くも  
意氣地がねねと云つて明日の晝に爲ちやア尙更世間の恥晒した

其十五

庄太夫は小面倒と云ふ面色、双肌脱きて、よろめく玉の黒髪をば  
ギリ／＼己が左手に捲きつけ、碓石に捻ぢ伏すれば、玉は益々怨み  
の眼光血に染みたる手を悶いて、苦しき呼吸も漸續に、庄太夫殿是  
ほどまで頼むでも和郎は許て下されぬか、イヤサ庄太夫殿、罪科  
もない與四郎が命ばかりは助けてやつて下されよッ、喧しいわへ  
助けやうと助けまへと、犬畜生の汝が指圖は受ぬから早く往生し  
て仕舞へ、うりや何あつても妾の頼みは「知れたことだ」是につけて  
も怨めしいは郎殿ッ」と叫びながらに身を悶き、白刀を逆手に我  
身の上、踏みまたがりし庄太夫を力限りに刎ぬのけて、スッ／＼と其  
所に立ち上れば、身内の傷よりグッ／＼と進る血汐は泉の如く逆立  
つ髪は、鐵の針、庄太夫も我知らず、二歩三歩たぢろざしが、モウ之れ  
までと度胸を据へ、足踏んがけて押倒せば、玉は又も仰向けさま  
手足を縮めて齒を食ひしめ、思へば口惜い須藤郎殿、やはか其まゝ、  
置くべきアッ、庄太夫殿も其通り今日限り極悪人の郎殿と兄弟の

まゝよ彼處の五ツ辻で... ウム是が上分別だど獨り頻りに頷き  
ながら彼の一刀を腰にツッ込み、イッ立ち上らんとする折しも何  
所の家か鶏の聲、ボツ彼りやモウ一番鳥か知らん、其様なら夜明に  
程もあるめへ下らぬ邪魔の這入らぬ中、いま一と竹折るとしやう  
か併しまア身から出た錆とは云ひながら、今日が今日まで女房よ  
お玉よと可愛がつて居た奴が僅か一晚立たねに中、此容に變つ  
て見りやア、餘まり嬉しいものじやねに、是れも成行なら仕方  
もねにど、流しは人情我知らずお玉の死骸を振り返れば、不思議や  
彼方の隅と思し、悲しげなる女の聲、庄太夫殿、何うでも妾の頼み  
をばと言ふは正しくお玉の聲、音ハナ確かに絶息たお玉が、今  
に爲て口を利く等はねに「と、不審ながら庄太夫、ソツとお玉の  
死骸を覗けば、正しくお玉は死切たり、うんなら心の迷ひか知ら、死  
人の物言ふ理屈、アねに「と、流しは剛氣の男ゆゑ、左して怖ろしとも  
思はず氣を取り直して表に出れば、最早東は白みろめ、空に裂れる  
星影の光も漸く薄らぎ、西に入らさの月白く、道の邊に生ふ秋草

其十六

は、霜に化粧の返り咲き、口を見るまでの命とは、

實にや人の身の果敢なさは、嵐に誘ふ花よりも明日またれぬ無情  
の浮世扱ても職人の與四郎はゆくりなく、昨日の暮片柳の親父  
より、病氣の知らせ來りしかば、孝心一途の正直者有聲に打捨て置  
くに、もならず、主人の女房お玉に乞ふて僅か一夜の暇を貰ひ、心も  
空に片柳の親父が許へ歸り來れば、病氣は思ひしより輕かりしに  
先づ安心の胸を摩り、夜の明るまで父の枕邊に看護して、行末のこ  
となきを問はれつ問ひつ親子にて、語り明して居たりしが、熱々思  
へば主人の方も何かと仕事に忙しき中、手間を欠ては済まぬ程と  
隠りかけたる父與左兵衛をゆり起して事の旨を得心さすれば、與  
左兵衛も喜び、貌ヲ、爾どころじやない、頭に白雲のある頭から、お  
育て下された御主人さま、早く歸つてお手間を欠せ申さぬやう爲  
るが何よりじや、殊に乃公の身体も年老て居るから、一時は驚いた  
やうなもの、此分では大したこともなさそうだから、必らず心配



するには當らぬわへ併しア阿父様又仕事の都合に依ては今晚  
にも来て見やしやう、マア下らぬに心配をしないやうにして、身  
を大事にして下せへ、折角私も是までに勤め上げいま一二年も立  
てば瘦腕ながら一本立の紺屋の親方になる量見だから、其時そ  
は今までの取返し、甘い酒の一杯も阿父さんに飲ませること出  
来るだろ、うと、そればかりを樂しんで居るのに、マア其様ことは有  
つた日にやア大變だけれども、モシ阿父様の身非に間違へても有  
た日にやア百日の説法屁一つだ、何してもモウ少しの辛抱だから  
萬事の不自由は、コレ阿父様我慢をしてくんなせへよッ、と思  
る、與四郎、老父は頻りに鎖きつゝ、親なればこゝろ子なればこそ其様  
云ふて呉やるならうことなら、其方の出世を見た上で彌陀の御淨  
士へ行きてねと思つて居るが、何と云ふても寄る年なり、老少不定  
の婆婆だから、明日のこととは話せね、コレ與四よ、乃公の身に若  
しやのことかあつたにもせよ、我儕に限つては其様ことはあるめ、け  
忘れてはならぬ、ア我儕に限つては其様ことはあるめ、け

れど、兎角世間の若い人達は、鬼の折から面倒を見て貰つて、仕事  
なり商賣なりを仕込むで頂いた御主人に對し、已れ一人でも覺  
にたやうな面をするばかりか、中には随分恩を仇で返すものさへ  
少なからぬ世の中じやが、夢にも其様な量見を起してはならぬぞ  
よ、イヤモウそりや阿父様の仰やるまでもね、何と、假令夜寝れば  
ッても御主人の方じやア足を向かせんよ、別けても己んどころ  
の内儀さんと來た日にやア、奉公人に目をかけて下さるとア、實  
に口にも話しきれぬ位でござね、やすよ、何にしても阿父様、先刻  
方二番雞が鳴いたばかりで、チツとまだ時刻は早い、是から寝て  
又寝忘れるといけね、からそろ、出掛て行きやす、此分なら減多  
のこともありやすめ、にが隣りのお北婆さまに克く頼むで、置きや  
したから、其つもりで居て下せへ、ナニ大體の事なら、又今夜やす  
よ、と、挨拶しなから、蒲團の帯なぞ押つめて、風の當らぬやうにして  
いろしく我家を出けるが、是子一生の別れとは、神ならぬ身の  
白髪のお父、與四や、庄太夫様、御夫婦に宜敷申してくれよ、と、言ふを與

四郎表の戸口に開つけて「眩度然う言やすから、安心しなせね、そんなら阿父様又來やしやう」と、流石血氣の威勢よく襟飛び下りて、草履突かけんとする其途端、何したわけか右の鼻緒がフツッリ切れて身をのめるに、與四郎思はず舌打して「チエッ今朝下したばかりの蕪草履だのに、何だつて切れやがッたらう」と、獨語ば、中には父の與佐兵衛が聲與四や何が仕たのか、足元に氣をつけて行けよ」

其十七

與四郎は草履の切れしに詮方なく父與左兵衛が穿き古せし草履を穿ちて片柳村を立ち放れ、一里に餘る暇道、他目も觸らず急ぎ足今しも中新井の東外れ、五ツ辻となん俗に呼ぶ五本の道の合さる所粗末に彫みし石地藏も、心の加減か睡たげに泉然不む後には、我身を殺す大敵のありと知らねば與四郎は、思ひの外に道の抄取りしを喜びて「此まで來れば此方の者だ、成程夜道は早いものだなア」と、口の中に眩さつ、眞一文字に下新井の道へ差かゝらんとする頃、頭は、夜も大方に明け放れしかど、朝霧深く立ちこめて、二間と先は

見ぬざるほど、與四郎元より何の氣もなく二歩三歩地獄の前を行き過ぎ、窟の畔に片足かけ、東の空を詠めながら「ア、朝の道中は心地の宜いものはね」と、在所の習ひで立小便を初めけるが、實に此時の與四郎が身は、風前の燈火石下の雞卵。  
浅瀬にあさる驚ならねど、忍び足に地の音をぬすみてよばひ、腰にめく一乃右手に提げ、左手に裾を端折つ、石地藏の片陰より立ち現る、庄太夫、手拭ひ眉深に面を包めば、チヨッとはそれと知れがたし、與四郎待ち兼ねたッど、掛聲諸共庄太夫、立小便に餘念なき與四郎が横腹目かけて切りつくれば、アッど一聲叫びながら大へ倒れて、キッと對手の面を凝視、何奴なれば卑怯にも此與四郎を暗撃するッど、言ひつゝ小石を掻き捨て、庄太夫に投げつけんとするに、元より覺悟の庄太夫は身を翻へして小石を避け、小癩な真似を仕やがるな「ヤッ然ふ云う聲は且那樣じゃムへませんか」ア、定めし喫驚したであらうが、已だ、庄太夫だ、イヤッ汝が主人の吉澤庄太夫だ、手前風情をばらすのに暗撃をするぞ云ふ聲じゃねわが

逃たりかくれたりされちやア小面倒だから先づ一刀お見舞申し  
動けぬやうに仕た上で、是から引導してやるのだ「ヒエーッそり  
や又何云ふ譯か知らぬが、且那樣に對して此與四郎、アイタタ  
と貴郎に對して此與四郎は、お、お、怨みを受けるやうな悪いこと  
ア仕た覺にはムリやせん、アッイタタと」と苦しみながら起上る  
を庄太夫は足にて又も撞き轉ばし「コレ與四郎、乃公だッても鬼で  
もなけりや蛇でもねに七ッ八ッの時分から内に育てた手前を殺  
してにこそはねにけれど、何でも生して置けぬわけは、乃公の口か  
ら言はずとも手前の胸に開いて見ろ「イヤ」私に限つては其様  
な覺にはムへません「ナニ覺にがねにこたアあるものか、何か覺に  
があるだらう「イエ」何と仰やッても悪いことを仕た覺にはア  
イタタとアッ苦しいアッ切ねに」と半分口をき、かけては脇腹  
の傷を押へつ、溢ふる血汐止むれども中々止まらんやうもな  
く見る「中に道一面、千草も共に染めなせり、庄太夫は物ともせず  
「コレ與四郎、何でも手前は覺にがねにが、其様なら斯して言はせる

しと、刀の尖にて二ッ三ッ續けさまに額の邊を打掃ゆる、與四郎益す  
悲鳴を上げ、道の真中を匂ひづりながら立つる聲さへ枯々に「モ  
且那樣、うりや道慾じや」御道慾でムります、昨夜一晩片柳の親父  
が病氣の爲め、お内儀にお願ひ申して内を明けた其留守に誰が何  
様な告口でも仕たのか知りませんが、マア「其譯と云ふを聞かせ  
て下せに」是程に言つても知らぬとぬかすにや仕方がねに、乃公が  
今聞せてやるから、自駄婆駄しねにで能く聞きやがれ」と、唐突與四  
郎の奴頭を引つ掴むでグッと引き寄せ、與四面を上げる、イヤサ  
や此洒面で、克くも「主人の女房を横取して呉れたな、此庄太夫が  
而へ美事に泥を塗てくれたな、ア、エッ此な思知らず奴がッ」と言ふ  
より早くがア、一聲與四郎の顔を目がけて咳唾吐かけ、尙  
も大地に引き倒せば、與四郎は餘りの意外に身内の苦痛も打忘れ  
けん、思はず庄太夫の足に取付き、且那樣、うりや又何云ふ証據が  
あつて此與四郎に其様な冤の濡衣をッ、何だ冤の濡衣だど、この  
口から冤だの、濡衣だのッてぬかしやがるのだ」と、言ひさま又も庄

のみ、庄太夫はモウ是まで暇を取るほぎ面倒と、色を決して與四郎  
 の細首、ヤツと一聲切りつくれば、何かは以て堪るべき脆くも首は  
 胴を放れぬ、庄太夫は獨り語、是で漸く畜生奴張の成敗はすむだが  
 内へ返るも延喜が悪い、是から直ぐに中新井の先生のところを叩  
 き起して酒でも飲まにやア氣持がわりいと、眩きつゝ、與四郎の屍  
 を傍の溝に押落して、血に染みたる刀を拭ひもやらす鞘に收め  
 悠々然と立ち去らんとする、此時早く彼時遅く、又も先刻燄火の落  
 て消れたるど覺しき邊りにムラと立ち上る一道の鬼火、中に明  
 々玉の面影、朦朧として立ち現れ、若しげなる聲を放ちて、「コレ庄  
 太夫殿、何故髪を捕へさしては下されぬぞ」と言ひつゝ、兩の指先よ  
 りボク血汐の滴り落つる手を差のへ、溜かに庄太夫を壁ねくと  
 見れば、怪しや此方の庄太夫、五体思はずブルと顛ふて後髪をば  
 引かると思ひ、一歩も足の進まぬより、餘儀なく刀の鞘を拂つて妖  
 怪目かけて斬りつくれば、空を拂つて影もなし、ハテ訝しと庄太夫  
 我と心を押鎮めて、四方を見れば、何時にかに、旭日東の山を放れて

太夫は苦しむ與四郎の頸髪引き据に、悲鳴を上げる、與四郎の上唇  
 を削ぎ落せば、淋漓と滴る鮮血は口の中に溢れ入り、物言ふこと  
 も出来ばこそ、無念々々と呼ぶ中、心は逆せ、目は眩み、口惜と云ふ一  
 心に主人も我身も打忘れ、血みごろの顔振り上げて及ばぬながら  
 一生懸命、血刀提げてスツクと立つ庄太夫の帯際取り、よろめきな  
 がら立ち上れば、庄太夫は苦笑ひ、「一寸の虫にも五分の魂ひたア能  
 く言つたものだ、此容に爲てもまだ乃公に手向ひやがるだけしは  
 らしいや」と、突き退けなからに刀を振上げ、突れ一刀の下に與四郎  
 が身は眞二ツにならんとする時、何處よりか飛び來にけん、いと物  
 凄き一点の燄火、陰々として庄太夫が目先きに燃え立つ、剛氣の庄  
 太夫は不思議顔、振りかざしたる刀をもて横なぐりに切り拂へば  
 不思議や、燄火はパツと地に落ち消ゆると直ぐにモロくと立ち上  
 つたる一條の白烟、流石の庄太夫も薄氣味わるく、思はず知らず引  
 き下れば、與四郎俄かに力を得て、庄太夫の手首にしがみつぎ、頻り  
 に物を言ひたげなれども、上唇を削かれし爲め、只ムカと急せる

背負ふて来たりにしかならぬ。年をとりたる母の顔を見て居ては流石にも、うれと心を明し兼ね、勿体なしと知りつゝ、巧みに老母を欺む。さて、ソツと實家を脱け出でし事の始末は讀者も已に知り玉はん。儲もお玉が首尾よく老母と庄太郎の疑念を待ち受けて涙なが。がらに立ち去りし後一時ばかりの間は老母は何の氣も付ず孫の庄太郎を懐らし心地よげに睡りしかば、虫が知らずか庄太郎、眞夜中に頭を目を覺し老母が萎びし乳房をば、幾度となく探りしが、見にも何となく容子の違ふを訝しみて、ソツと聲立て泣き出すに老母も共に眼を覺して、祖母じゃ、庄太郎の祖母さまじゃ、怖じや、と見たのであらうが、怖いことはい、サア此方へ向ひて寝な。夢でも見たのであらうが、怖いことはい、サア此方へ向ひて寝な。じや、と、小聲に賑せや、庄太郎、中々泣きは止まばこそ、老母は餘儀なく頭を擡げて開かたりながら、玉の臥せしと思ふたる、次の一問を差。覗き、玉よ、ソツと二聲三聲呼び起せども、返事なし、老母は直も聲高くと、コレお玉よ、孫が目を覺して困るほどに、欺してくりやれ、ハナ。ナ、如何に若いものとは言ひながら斯も克く睡らるゝものか、と、小

彼方の森に鳴き騒ぐ曉鴉の聲も喧すし、加之覆本村の方より人の高話しつゝ、來かゝる氣色に、庄太郎は只夢の如き心地して、傍を見れば、今し方正しく我手にかけたりし、今までは目先の身にぬまで霧立ち。そんなら夢にはあらざりしか、今までは目先の身にぬまで霧立ち。こもり、宛ながら暗夜の如く覺はしに、お玉の影の消ゆると均しく。一時にパツと旭の出しも一ツの不思議、我身ながらに合點ゆかず。と、首傾むけて思案しながら、中新なる郎閑の下に玉れば、いまだ。門は開かねども、環て容子を知らず、戸端にゆきて一釣瓶の水を飲。潜り門より内に入り、何より先に井戸にゆきて一釣瓶の水を飲。み干し、ア、是れで心がサツパリとしたわね、何りや先生を叩き起して、昨夜の始末を物語らうか。

其 十 八

談話戻つて田向ひなる、お玉の實家田村與左衛門方にては、其夜折悪く主人與左衛門を初め妻の喜代は小廝を連れて、親類中の祝言に行きし留守の間に一生の名残と彼の、お玉は我子の庄太郎を祝

言ながらに孫の 太郎を抱き上げて、泣じやない、いま阿  
さんを起してや、ましやう、コレも玉よ、早く起きてたもらぬか」と  
呼べど叫べど次の間には何の返答もなしの隙  
然あれ老母は、疑ひもなく娘のお玉、次の間に臥し居るならん、信  
ぜしかば、今しも我抱寝せる孫の庄太郎が眼を覺して泣き喚めく  
に持て余し、幾干お玉を呼び起しても返事なく、行燈さへ消にてあ  
りしに初めて少し不審を起し、探りながらに衾を伺ひいで、漸く行  
燈に火を點じて、お玉が衾を打ち見やれば、這は抑も如何に主は何  
時しか空蟬のぬけの壳となり居るにぞ、老母の驚ろき一方なら  
ず、泣き入る孫を抱き上げつゝ、讀げさまに七聲八聲、娘よお玉と呼  
び叫べど、元より返事のあらう筈なし、老母は宛ながら狂氣の如く  
頭是なき入る孫よりも一尉に又オロ、  
今に爲つて考れば思  
ひ當る事ばかり、孫を背負うて來た時から、頬の打傷、眼のしみ、不思  
儀なこと、思ひしゆへ、彼程まで聞糺しても、眞實か嘘か知らぬ  
とも、酒狂の上の夫婦喧嘩と事も易げに言ふたゆへ、それもさうか

と親の氣で子に欺されしが一生の過失、此様なこと、知つたなら  
壁へ衾に這入れればとて、臉を合さず居たものを、殊に依たらコリヤ  
娘は克く、幸いことがあつて、母子一世の暇乞ひに來たのではあ  
るまいかと、氣付て見れば中々に坐ても起ても居られればこそ、孫と  
二人で左つ右つ、裏の庭やら表やら、サテは勝手の手の中まで覗い  
て視れど影さへも泣くや、霜夜の蟋蟀、答ふるものは、遠山寺の鐘は  
かりア、折も折も、泣くや、嫁女も留守の間に此様なこと、降り來  
るとは、何たることぞ、如何はせんと、立ち騒ぐは、孫庄太郎共に悲  
しき淋しさに、阿母ちやまよウ、と泣き立て、手足を顔はし身を  
反向け、柔弱き老母の手にをへねば、今はほと、困じ果て心も宙  
に大戸口、娘よウ、お玉よウ、と我を忘れて叫ぶのみ、外に詮術なかり  
ける。  
洵とや佛の教訓にも一念凝つて死す時は、魂魄此土を立ち去らず  
宇宙に彷徨ひ居ると云うれかあらぬか、母と子に殘るか玉が愛  
着心、假に姿を現はして再び來つる我家の門、茂る柳の葉がくれに

悄然として、而影、老母より先に、正太郎早くも目につく母の前  
「アレ、彼處に阿母ちゃんが」と、指しながら嬉しげに老母の手をば  
振り切つて、駈け出さんとなしけるを、老母は慌て、引き止め、コレ  
「何處に阿母さん」と、言ひつゝ、門邊を打ち見やれば、成程孫が言葉  
に違はず、柳の下に、不む人影、チ、是其所に居るのは娘じやないか  
と、訝しみながら、瞳を定へ、克く見れば、何所やらに、朦朧として判  
然せず、無きかと思はれ、有るがごとく、有るかと思はれ、無きにも似  
たり、老母は愈々不審に堪へず、絨袴に力を入れ、コリヤお玉よ、汝  
や其所に何して居るのじや」と、言へば、彼方の人影は、スルとして  
音もなく、次第に此方へ近寄る氣色、老母は尙もはがゆげに、娘よ、早  
く此所へ来て、孫を欺して、くりやらぬか」と、言ひつゝ、チツを星影に  
お玉の姿を打見やれば、髪は亂れて、顔色蒼白、肩の邊より脇腹にか  
け、何者に切らしにや、マク」と、迷する血汐の紅ぬ、怨めしげなる眼  
中には、得も云はれぬ、凄味を帯び、奥歯をキツと噛みしめて、口惜  
うに、此方を凝視するばかり、何の言葉もかけざるより、老母はヒエ

其十九

「ッ」と驚ろきつゝ、思はず知らず、孫を振り捨て、お玉の傍へ差寄せ  
ば、お玉は左も、苦しげに、身内の傷を支へながら、モン母様、身に覺  
けなき、冤の罪で、此様な容になりました、モウ此世では、モウお目  
にかゝることは出来ませぬから……庄太郎が、行末をば、偏へに  
お頼み申します」と、言ふ聲さへも、幽かに、切々に聞けり。  
老母は思はず、尻餅搦き、エ、ッとはかりに、狂亂聲、そんなら、汝は何  
者にか、殺されたのか」と、驚きながら、お玉の傍に、寄り寄り、お玉は  
又も、苦しき息を、繼ぎ、母様、只ツ、今殺されて、此始末、う、う、うして  
其方を、殺した、對手と云ふは、さ、さ、この何奴じや、何奴でも、ない、永  
年連れ、添ひし、庄太夫殿に、ッ、口惜さうに、言ふかと思へば、ハッ、  
りとお玉の姿は、消に失せて、風に、ゆらめく、青柳の糸より、細き虫の  
聲、左も、哀れげに、聞ゆるばかり、庄太郎は、慄きつゝ、老母の袖へ、縋り  
つき、婆々、ちやま、怖いよう、アレ、阿母ちゃん、何處かへ、行つて、仕  
舞た、チ、娘は何處へ行つたのじや、只、今其處に居たものか」と、涙

「ア、彼りやモウ明六ッの鐘、何時まで泣いたとて畢のあいこと、孫を連れて一ト走り、紺屋の家へ行って来たたら、萬事の容子が分るであらう、其上にての分別じや、うれはうと、俵と左工門、最早戻つて来たうな、ものじやが」と、我と心を取直し、曲れる腰に孫を負ひ、我家の門を出合頭に、俵の與左工門、女房の喜代、諸共、息も急しく駆け来りて、パツタリと老母に行き當る、互ひに不意に驚きて思はず歩みを止めつゝ、これはしたり母様では、ムリませぬか、「うう言ひやるは嫁のお喜代、チ、與左工門も一所か、宜いところへ戻つてくれた」と、慌てながらも、怡ひ聲、與左工門は不審顔、私共夫婦が留守の間に、何か變事でも起りましたか、「イヤ、起つたの起らあいのでは、あ、ア、其方等が戻つて呉れたら、兎も角も一應相談をした上で、出直すとしませう」「ハイ、それか、宜しうムリます」と、お喜代は姑の背中より、庄太郎を抱き下して、己の背に負ひつゝ、三人共に内へ入り、祝儀衣服もろのまゝに、庄太郎を中に三ッ鼎、先づ先に與左工門、シテ、阿母さん、私共が留守の間に起つた變事と云ふは、ア、何様なことぞ

にかすむ眼を、展瞬き、怖がる孫を抱きしめて、柳の下に歩み寄り、「コレ、玉、モウ、チット、汝に聞きて、ねこがある、今一度、姿を見せて呉れ、コレ、娘よ」と、聲も惜まらず、呼び戻せば、親子の禰流石にも、又、膝と見はる、影は正しく、娘の玉、アレ、阿母ちゃん、お彼所に居たよ」と、指す孫に、氣をつけられ、「ドレ、何處に」と、身を延び上げ、お玉の影に迷向へば、お玉は何の言葉もなく、只、潜々と泣き入る、氣色、老母も餘りの悲しさに、聲さへ咽喉に、押迫り、只、アレ、と、言ふばかり、稚き孫は、尙更に、母の變りし、面影に戀しくも、あり怖くも、あり逃げも、出さぬば、近寄もならず、ウロ／＼として、泣き叫ぶ、お玉は、やう／＼、面を上げ、老母と、我子の稚顔を、篤くと見やりて、ニッコと笑み、モシ、母様、何時まで居ても、名残は盡きませぬほどに、モウ、お暇を致します、只、此上は、吳々も、庄太郎が行末をお頼み申します、庄太郎も、又、婆々様をば、母とも、父とも、便りにして、お年寄られた婆々様のお言葉、を必ず、振り返り、つゝ、消えて行く、葉末の霜や、曉の鐘に、老母は、耳傾むけ



参りましたるが此の喜代が言ひますには何でも今の死骸は身替の  
 合格から着物物の工合は年の若い職人体に依たら庄太夫様とこ  
 ろの與四郎ではあるまいかなど、頻りに考へて居りますから何  
 うなことがあるものか心の迷ひだど叱りつけて門先まで戻つ  
 て來ると阿母が又此子を背負て出かけやうとしなさるところ、殊  
 に依ると阿母さん、コリヤ妹の玉が職人の與四郎と下らぬに真  
 似でも仕たと云ふ嫌疑を受けかぬ氣の庄太夫のことゆへ、妹及  
 び密夫をば一所にばらして仕舞たのかも知れませんと、不  
 さうに言へば女房も喜代も口を出し、爾仰しやれば尙のこと、何  
 五ッ辻で見た死骸は與四郎のやうな氣が仕ますと、言はれて老  
 は又喫驚う、うりや悴全くのことか。

其二十

却説も中新井村の豪士須藤斧右衛門は流石他人のこと、は云へ  
 現在に己れの刀までも貸與へて是非は兎もあれ、一人ならず二人  
 まて殺させにやりし事あれば、庄太夫が歸りし後も、只何とやらん

ムりますと、問へば老母も膝押し進め、詳しい辭は解らぬとも、其方に  
 は妹妾が爲めに掛替のない一人娘、下新井のお玉が今夜殺され  
 て死で仕舞たわへ」と言ひ果てぬ間に又ッつと我を忘れて泣き出  
 すに、夫婦は吃驚顔見合せ、異口同音に老母に向ひ、うりや眞實  
 のことと云ふ、一ツの證據「爾して其妹を殺した對手と云ふは」然ればい  
 を見ても一ツの證據「爾して其妹を殺した對手と云ふは」然ればい  
 のふ譯らぬと云ふは此處の所、現在婚の庄太夫に「ヒエッ」うれも  
 何だか冤の罪を被せられたやうで「ハテナうんならば阿母さん少  
 し待てくたされよ、今方私等が榎本の婚禮をすまして、長太をば後  
 に殘し、お喜代と二人で來る途中、彼の五ッ辻の地藏前までかゝり  
 ますと、雨氣もないうに妙に道中がぬらつて居ますから、何だか變  
 など思ひながら足元を見れば一面の血、うれに一ッ度胸をぬかれ  
 て怖々ながら側溝を振り返ると、何者に切られたのか生々しい  
 男の死骸、コリヤ大變だ、人を殺し、此様あところに行つて掛合に  
 ても爲てはと喜代の手を引ッ張つて息をも續かす斷け出して

計器は「と言はんとして、ハツと氣を付壁に耳ある世の中じや、只何事も親切でか、し、ううじや」と頷きて番打ち船ひ内に入り、ソツと雨戸を引き寄せ、合ぬ臉を無理に合せ、其引き被さて枕に就けば、精神の疲れに何時となく恍惚として夢路に入る、此方は吉澤庄太夫彼の五ッ辻に與四郎を殺害しての歸り足、斧右衛門方へ訪ひ來れば拂曉のこと、て誰一人起きて居らぬ、うれも却て折好しと裏手に回りにて井戸の水に咽喉を濡めし、悠々然と衣襟を繕ひ顔色をさへ態に柔らげ、孫て知たる郎閑が寢室の窓下に至り、四方を憚かる忍び聲、先生、々々、斧右衛門様、まだお目覺にやアなりませぬか」と訪なひながら窓を叩けば、老の早耳須藤郎閑「チ、爾う言ふ聲は庄太殿じやねか」と欠伸ながらに起き直りて、寢衣のまゝに雨戸を明け「サア此方へ還入ッしやれ、先刻方までは下らぬ軍書本を見て起きて居たが、只ッた今トロくどやつたところじや、うれば兎に角今夜の首尾はッ」と待遠しげに問ひかくれば、庄太夫も小聲にあり、お咄は中々長ふムいますから、チヨツクサチヨンは言は

氣遣はしく、夜に入りては尙更のこと、ア、今頃は庄太夫胡麻の中に入れ置きたる刀を取りに來たりしか、ア、今頃は女房のお玉を切殺したか、但しは未練の心起りて遂ひ愚圖々々にすましはせぬか、イヤ、此處等界隈に、荷にも男一匹と自らも許し他も稱へる庄太夫、ヨモ、女房の愛に弱れて見逃しにするべき氣遣ひはあらじ、何れにもせよ此方はね、梅ひなきもの、彼の玉さへ居なくなりやア、萬事之首尾は上々、吉相を開きたいものだと、待てば一夜も千秋の壁へ、寝て見つ起きて見つ、釜の中、風に落葉の隙ぐ影、白く星稀に、曉近き頃あるに、ア、是りやモウ夜明けやわい、今まで待ても來ないからは、何か邪魔でも遣入れたのかしらん、併し約束の刀は取りに來たか」と、眩きながら庭下駄を穿ちて下に下り、飛び石傳へに玄關側、覺して入れ置きたる胡麻壳の中掻き探れば、正しく刀はあらざりける、斧右衛門は片頬に笑みを含みつゝ、「ア、ム、うんなら何時か取りに來たのか、十に九ッは思ひ通り、此郎閑の

れませんが、お蔭さまで何やら斯うやら二匹共、思ふ存分にヤツツ  
けて来やしたと、手柄顔に吹聴すれば、斧右衛門は出来したと言は  
ぬ計り、うんなら庄太夫殿、美事に姦夫姦婦の成敗をば「なアに成敗  
と云ふやうな立派な手際にはやア行きやせんが、何しろ貴方から  
借申した此一刀、丈はねねが切味の宜いのは素人ながら感心し  
やした、一体マア此刀は誰の作でムいはず」と言いつ、彼の脇差を  
腰よりぬきて、郎閑の前に差置けば、郎閑は左も自慢氣に小鼻をひ  
くつかせて「なアに誰の作と云ふやうな業物ではなけれども、焼が  
宜いと思込むだゆへ、チロツト價値は高かつたが、好んで求めのさ  
し庄太夫殿、お前と乃公と差向への時は、ンお話を仕ても構は  
ぬけれど、世間へ出ては刀まで乃公が物を貸たなど、は必らず言  
ふて下されまいぞ」然うところじやムいません、ナニしろンお徳  
にもならぬねことを、時に先生又コンおことを言ひ出したら、申法  
だとか、弱虫だとか笑われるかも知れませんが、生れて始めて人殺  
しをやらかした、加減か胸の邊りが動悸ついて仕様がありません

から酒を一抔飲ましては下せねせんか、ナニ者も何も無用ませ  
んよ」宜しいとも、今直ぐに誰か叩き起して準備をさせましやう  
と言ひつゝ、自ら身を起して勝手の方へ行かんとする時、阿父様モ  
ウお目覚めにありましたか」と、優しき聲に會釋しながら此方の座敷  
に入り来るは須藤郎閑が總領娘、糸江と呼べる女にて年齢は盛り  
を過ぎたれども、田舎珍らしき美形あり、庄太夫は豫ての懸念、別に  
憶せる氣色もあく「ハ、ハ、ハ、糸江さまでムりましたか、久しくお目  
にかゝりませんかつたが、昨晩は阿父さまの方にて泊りでムりま  
したか」と問はれて糸江、何とやらん極まりわるげに「イ、エ七八日  
前から阿父の方に參つて居ります」それは又何した譯で「アノ少し  
ばかりつまらぬ行違ひがムりまして」と話しかゝるを郎閑引ッ取  
り、イヤモウ兎角婆娑は面倒臭いことばかり、子を持つても樂は出来  
ませぬわね」

其二十一

意味ありげなる郎閑が言葉に庄太夫は、早くも氣付うんなら何で

計のありとは露更に知らぬ吉澤庄太夫うりやア何しても飛ん  
だことでもムリしましたなア併しながら先生世の中と云ふ奴ア、そう  
中々我思ひ通りに行くもんじやムいませんから、大体の事なら我  
慢なすってと、昔まで言はせす斧右衛門手もて頻りに打消ながら  
「イヤ、庄太殿乃公も其邊に心注かぬではないが、五体揃った女の  
子を好むで馬鹿な男に娶せて置くにも當らぬことだ、時に庄太殿  
物は相談だが、乃公の口からこんなことを云ふでもないが」と言ひ  
かけて俄かに口を籍み、何氣あしに娘の糸江を顧みて「ア、是れ娘  
汝ア彼の勝手へ行て、酒の仕度を仕て来やれ、ナニ肴がなければな  
いでよい、氣遣ひなる客様ではなし」と、娘を勝手に追ひやりて、サテ  
改めて膝を進め、コレ庄太殿乃公の口から此様なことを言ひ出す  
と、何だか最初からでも取仕組で、自分の娘を籍め込みたさが一抔  
に、お主を甘く焚きつけて女房のお玉を殺させたでも思はれて  
は、甚だ以て迷惑の至りだが、お主とても年が年なり、うりや勿論廣  
い世界だから五十男が十七の初物を嫁に貰ひ當ぬと云ふ限りは

ムリですか、何かお嫁入先に不祥なことでもムリまして、それで戻  
ッてお出でなさるのでムリですか」と、押返せば「ナニサ不祥なこと  
、言ふではなけれど、お主も環て知合であるかは知らぬと、此れが  
嫁入した先の婿殿と云ふ奴は、何も乃公が氣に食ぬことばかり多  
いものじやから、此間取返して仕舞つたのさ」「へいそれは初めて伺  
ひました、富田村の瀬左衛門と云へば、門閥と云ひ、丸持と云ひ、  
ア、在方にしては堀でもないお家と承はって居りました、爾云  
ふお家の息子様のもとへお片付なさって居ながら、何が又お氣に  
食ひませなんだな」と、不審げに問へば「サア門閥や身代の方には、別  
に不足はないけれど、何を言ふにも、肝腎の婿と云ふ奴が、何も持  
つところの長い性質で、兎ても乃公の相談相手になりさうもない  
じやて、女の子と云ふては天にも地にも只つた一人の此糸江乃公  
が相談相手にでもならぬやうな男に添はし置くのは、マア、早く  
談話が此娘も氣の毒、チーット聖人の教に反いて居るかも知れ  
ぬが、實は思ひ切て取戻して仕舞ひました」と、言ふは内々腹の中、謀

助けると思ふて娘の糸江、女房に持て下さらぬか」と、愈よ眞似目の  
談判に、庄太夫はと、困じ果て、數ならぬ私をば、それほごまで、仰  
やつて下さるものを必らず嫌とは申しませぬが、モン先生、私の方  
より先づ「お娘御の方から聞き合せあさらぬと、飛んだ間違ひ  
が起りますぞ」と、尙幾分か、戯談まざれ、品よく避くれば、斧右衛門、ナ  
ニサ「娘の方は大丈夫じや、此親父が保証をする」サア幾干保証な  
さつても是ばかりは御當人の胸を開かぬ中は「アハ、お主も見  
懸に、寄らぬ疑ひ深き男じや、なア、そんなら話して聞かせやうか、實の  
ところ、は庄太殿、乃公の娘は、疾くより、主に惚れて居るのじや、わ  
た「エッ何と仰り升「サア庄太殿、乍麼に心安い中じやと云ふて、現  
在親の口から乃公の娘は、お主に惚れて居るなご、云ひ出すと  
云ふは、神武以來、無い形なれども、是が所謂、奥底の、赤い正直話じや  
世間の人は、何か此斧右衛門をば、斧右衛門と呼ぶ者は、なく、鬼右衛  
門々々々々、と、緯名をつけて置と、だ、鬼の目にも涙は、こも  
るの、比喩で、我兒の可愛のは、同じことじや、ソリヤ、何今も、れ、主の言

あけれぞマア「そりや、滅多にやアね、ね、こと、殊に、先妻が、密夫をし  
て、切り殺された、なんぞと云ふ、後へは、お主の前だが、マア「餘程の  
變り物で、いもなけりや、諄い、咄だ、ト云ふて、何も是非とも、乃公が娘  
を買つてくれではないが、コレ庄太殿、相談と云ふは、此の、ところ、出  
返り、女の、糸江、ゆへ、餘り有難くもあるまいが、炊女代りに、引き受け  
ては、下さるまいか、サア「此様なことを、打ツつけに、云ふも、平生の  
懇意と云ひ、男と見込むで、斧右衛門、平にお頼み申すのじや」と、眞顔  
に、爲て、頼めども、流石の庄太夫も、是には、少し當惑して、顔に、返答も  
なし、かねけん、態と、笑ひに、紛らして、アハ、先生は、又御戯談ば、か  
り、糸江さんのやう、お容顏を持て、ムれば、出返り、位、いは、愚かの、こ  
と、例へ、百度目の、嫁入りでも、貰ひ人多くて、困るほど、庄太夫と、さ  
三文、奴は、トンと、お齒に、合ひませぬ、わね」と、うれとは、なしに、刎ね返  
す、斧右衛門は、頭を、掉り、イヤ「うれは、お主の、謙遜と云ふもの、ナニ  
今日が、今と云ふ次第では、あいが、只一言、ウムと、さへ言つて、呉れば  
うれで、乃公も、安心するのだ、ナニサ、庄太殿、老先の、短かい、郎聞をば

はしやる通り門閤と云ひ身代と云ひ何一ツ不足のねに富田村の  
瀬左衛門が息子の妻に呉れたのを無理矢理に取返したも親の慈  
悲ならうことあら鑑一文持ぬ者でも根性玉の一人前ある男の妻  
にしてやらんと獨り胸をば痛める折しもたしかアレは一日の  
朝であつたが平常の如く此座敷に乃公が一人で居るところへ  
入て来て、左も極りのわるさうな顔色して乃公に向つて言ふの  
には、エーモシ阿父様上を見ても下を見ても、際限のあいは浮世の  
習ひ、慾あ希望を起したところで仕方がムリませんが、出来るもの  
あらば下新井の庄太夫様見たやうな俠氣のあるキリ、とした  
人の女房になりたいたいの、ホンとに庄太夫さまとこのお玉さん  
は果報者でムリまするなアと左も羨ましさうに言つた一言、勿論  
其時はお玉さんの身の上とて、此様なことにならうとは夢の夢に  
も知らう筈なければ馬鹿奴何を言ふのじや、幾干手前が羨ましが  
ても、お庭の櫻で手も足も出たものじやないわッと、叱り散して置  
たれども、サテ今日のやうな場合になつた日になつて見ると、何せ

お主も此儘に獨身で終る覺悟でもあるまいし、何所からか買はね  
ばならぬと推したゆへ、無職ながら娘の押賣、併しア庄太殿今が  
今と云ふではない、内方の方の紛々がスッパリ片付た後で宜いの  
だが、返事丈ヶは聞かせて置いて下さるまいか」と言はれて吉澤庄  
太夫、暫時は何の返事もなく、只兩手を拱ねいて、思案の願沈むる折  
から、洵とに遅くなりまして、遂ひ火も何もをこしてなかつたもの  
ですからと、優しき聲に詫びことしなながら、鏡子盃持ち来るは則ち  
前の糸江なり、庄太夫額越に糸江の顔をチラと睨みて不審の眉根  
をひうませぬ、郎閑何の氣も付さず、サア、庄太殿飲むでくだされ、  
レた毒味を致さうか、娘酌を仕やれと差出す、盃糸江は静々酌しあ  
がら、思はず父と顔見合せ互ひにニマリと漏す微笑、仔細は神も知  
り玉はじ。  
郎閑頓て盃を飲み干し、庄太夫の方へ差出せば、糸江は又も庄太夫  
の傍に膝すり寄せ蓋しさうに酌あしぬ、一杯が二杯、二杯が三杯と  
盃の數の重なるに連れ、次第に心寛ろぎて、坐りし膝も崩れかけ談

話の調子も高くなる、殊に吉澤庄太夫は昨夜からの空腹に搦て加へて二人まで人を殺せし揚句のこと、酔じとすれど何時となく満身に回る酒の酔心ありげに側から介抱しながら待遇する郎閑が娘の糸江の肩我にもあらず手を打ちかけ、モウ糸江さま、此庄太夫は今日から立派な獨身者、お眼をかけて下さりませ、アハ、モウ是からは寧ろ氣樂な身の上にて爲て何となく日本晴が仕たやうな心地になりましたわ、時に先生、先刻のお話は全のことでムリませうか、ハテ御念には及はぬこと、論より証據、ソレ其處に居る糸江の奴に聞いて見さしやれ、なるほど、モウ糸江さま、貴女の阿父さまが此庄太夫が昨日かざりて獨身者になり下つたのを氣の毒と思召してかゝる前様をば私の女房に呉れてやると仰しやつたが、前様の方には御異存はムリませぬかな、アハ、此やうな事面爺はお厭でムらうが、アハ、一ツは酒が言はするあらんが、戯談半ばに酒落かゝるを、斧右衛門は、たどばかりに小膝を拍ち、コレ庄太殿、其言葉は嘘ではムるまいの、後に爲てから又彼は酒の

上に申したことを眞平御免あんど逃口上は困りますぞ、コレ、何故庄太殿に盃を上げぬのじゃ、今からはモウ和女は庄太殿の女房も同然、表晴ての興入は又追てのこと、云は、今日は媒妁あしの結納酒じゃ、コレはしたり庄太殿、お主は酷く醜醜の容子じゃが、モウ一ツお干しやれ娘のデハナイお主の爲めには女房のれ酌で、獨り合點の恐悦顔、扇を笏に坐を正し、高砂や此浦船に帆を揚げて、昔習ひし觀世流、憶面もなく、高砂や此浦船に帆を揚げて、レは、先生にも、手前同様、酔ひあされしと見ねるわい、如何に媒妁なしの結納酒じゃと云ふて高砂の謡曲は余りに手廻しが宜過ぎませう、アハ、何と糸江様爾ではムリませぬか。

其二十二

欺むくは其道を以てすれば、乍麼に聖人君子と雖も、一時は是に迷はざる、の例、況して聖人君子ならぬ田舎客の庄太夫、智慧の越たる斧右衛門に、其道をもて欺むかるゝとは知らず、哀れや貞探堅固なる女房のお玉と、職人の與四郎を切り殺したる刀の血も乾か

(七十九) りなれ玉

れんことこの口惜さに怪しきことは欠伸の先にも出さざりければ  
かくされぬは酒の酔急に醒めたる心地して夕輝の如き顔の色も  
一時に蒼く變ずるにぞ他に見る目の郎閑も不審を起して庄太夫  
に向ひ「コレ庄太殿か主は何處ぞ気分でも悪いのか」と問はれて此  
方は心の中南無三寶悟られしか我ながらに卑怯至極と氣を勵ま  
して襟掻き合し「イヤ先生別に気分が悪い譯ではムリませんが何  
だか妙に寒氣がして「ハァ」うりや余り昨夜露に當って冷で  
も引き込むたのであらふコリヤ娘彼の乃公が廣袖でもかけて進  
ぜろ「イヤ」糸江さまそれには及びません最早大分日も高くな  
りましたから徐々内へ戻って死骸の片付でも仕にやありませぬ  
わへ、鬼もあれ先生今日は是でお暇を致します糸江さま早朝から  
飛だ御振介をかけたましたと膝に手を突き立んとすれば不思議や  
腰の節開のあたりガッソリ音して痛み出すに是や奇妙とは思  
へども無理に堪へて左あらぬ顔左様ならば須藤先生「庄太殿」  
「又何卒お遊びに」と送る糸江が一言を耳に残して千鳥足郎閑方の

(六十九) りなれ玉

ざる中に早くも又斧術右門が出返り娘糸江となん呼ぶ婦人を、已  
が後妻にまで買はんとの約束せしころ、實に淺猿しき限りにころ  
あれ。  
然あれ庄太夫とて學文ころなかれ天性の愚鈍にもあらず、寧ろ人  
並に立越たる伶俐者、他の人の忠告ならんには是はどにも信ぜざ  
りしあらんが、何分にも平素より飽まで心服を打明居たる斧術  
門が言葉とは云へ、殊には男の意氣張づく、假にも一旦斯る噂の立  
ちたる以上は、最早寸歩も容赦はありがたしとの意氣張づくにて  
憤怒の餘りとは云ひあがら、事の實否も取糺さず、一夜の中に兩人  
を切殺したるなれば、今更に詮なきこと、毒を喰は、皿とやら自棄  
が手傳ふ茶碗酒郎閑糸江の兩人が勸めに任かせて飲むはどに  
今は殆ど呂律も回はらずなりけれども、時々身をば頭はして、ア  
ッとお息することあるは酔中あがら五ッ辻にて職人與四郎を殺  
害の際、影ともなく形ともなく目先に見はしる玉の顔、思ひ出して  
は我知らず、妙お素振を爲すあれども、流石に卑怯の憶病のど笑は



門を出て下新井ある我家の門へ返り来れば内には最早村人を始  
め職人親族ふ玉の兄與左衛門夫婦も来合して玉の屍骸は云ふ  
までもなし與四郎の屍骸さへ何時の間にか増き来りて都合二ツ  
の空骸を中に取囲み目を逆脹して居るもあれば不思議な最後と  
嘆くもありさては主人の庄太夫が行術を探しに出かくるもあり  
上を下への大混雑まだ其上に人の愛ひを怡び顔軒の下よ群りて  
死骸を詠め兎や角と悪口叩く彌次馬連さへ少なからねば庄太夫  
下らぬ奴等に而見らるゝも而倒と態々ツと裏口へ回りに内  
這入れれば待ち暮して居る折りどて主人の顔を見るよりも皆々一  
時に庄太夫の身を追取り繞き仔細を聞んと急るにぞ庄太夫は手  
もて先づと押鎮めつゝ下に座し前に控へし與左衛門に差向ひ悉  
しいことは申さずとも早や大概は御存じあらんが貴殿の爲めに  
は實の妹乃公が爲めには永年連れ添ひし女房のお玉あるべきと  
どか子伺の職人與四郎奴と不義の密通致せしゆへ不憫あがらも  
兩人一時に成敗ないたした定めし實の兄上たる御身が目から見

られたらば酷い仕方とも思されんが男の意氣地で仕方がムらぬ  
亭主の目稜を忍むで不義密通を働らくやうな人非人の妹をか持  
ちなされたが此方の不運それを又夢にも知らで今日まで女房よ  
妻よと可愛がって置たのは庄太夫の愚鈍人を怨むところではム  
らねども然りとて此ま、捨て置き置さば庄太夫一身は兎まれ角  
まれ先祖の位牌を汚すも同然餘儀なく成敗いたしてムるが御異  
存もあらば後日のこと何卒お玉の死骸だけは骨肉の好意か引き  
取あつて充分に御回向下されど度胸を据へてキツパリ言へば與  
左衛門も心の中一ツ二ツは言ふて見たきこともあると此期に爲  
て兎や角言はゞ却て世間の耻晒し妹の罪を辯解すると思はれん  
も口惜と思ひにければ悉是前世の宿業と諦めてソんならば庄太  
夫殿萬事は後日の話として今日のところは言葉通り妹の死骸  
をか貰ひ申し何にも言はず引き取りまじやうと涙ながらに指圖  
して血に染みたるお玉の戸を戸板に職せ職人共に撥はせて腹の  
中なる稱名も妹が靈に田向ひ坪我家へこそは引き取りぬ庄太夫

は小氣味好げに見送りて先づ女丈けは片付たが今度野郎の死  
骸だわねと獨語ながらッ、と立ち四方を見回して打鎖き役に立  
たざる藍瓶の彼方の隅に据へありしを、手からヤット轉がし來り  
與四郎の死骸を抱き起して、此中に屈め入れ、俵の蓋を打掩ひなご  
する中に、田向ひに行きし職人輩の歸り來るに、庄太夫は待兼顏ヲ  
、大きに御苦勞々々々々、氣の毒だが手前達も一ツ鍋の飯を食たる  
與四郎の死骸だから、何所か其所等の敷中へでも理てやつて呉れ  
ど、吩咐られて詮なくも職人輩は鋤鉄把り、屋敷に少し放れたる笹  
藪の中へ荷ひ行き、只一遍の經にも合さず、犬猫同様に群むり果る  
頃、は村人共も一人居り二人去りて今は大抵に歸り行きぬ、庄太夫  
は何思ひけん、奥の一室に引ッ込みて手枕のまゝに足踏むのべ、昨  
夜の疲勞を休めんとすれど、只何となく胸騒ぎして、夢結びかぬ  
夫のみか、先刻中新井の斧右衛門方を出る時にトした途端に痛  
み出せし腰の節、開、愈よ頻りにツキ、と痛みて烈しくなりゆく摸  
様なるにぞ、訝しみなながら起さ直りて若物を塞げ打見やれば、ア、ナ

恐ろしや血汐に染みし與四郎が手の痕、ハテ不思議なと若物を掩  
ひ上より見れば、愈よ不審、着物の方には血のにじみたる形さへな  
し、何しても妙なところがあるものと、這度は手拭懸掴み、方に任せて  
拭きこすれど、却て痛の加はるばかり、手の形あせる血汐の色は褪  
めんとせす。

其二十三

成程熟々と考ふれば、今朝五ッ辻に與四郎を殺害の折、お玉の姿見  
ゆると均しく、血みごろになりし與四郎奴が俄かに元氣ついて起  
上り、乃公が帯際引ッ捉むたが、其時印た手の痕か、うれにしても今  
に、なり痛出すはまだしものこと、血汐の色の落ちやらぬは愈よ以  
て不思議の限りなれど、俠客と呼はる、庄太夫が口より斯ばかり  
の、こと子分は愚か、醫者に明すも意氣地あしの骨頂なり、打捨て置  
かば、何とかならんと、痛を堪へて其まゝに、又も横になりけるが、秋  
の、日足のいと短かく、其日も嘔て黄昏過ぎに及びし頃、庄太夫は  
ト目を覺して、何心なく勝手近に立ち出れば、訝しや職人輩は一、人

音はバツリ途切れて、風もあらぬにガサ／＼戦々寒手の笹鏡何者や  
 らんと見返る目先に一團の陰火、何處よりか飛び來りて、庄太夫が  
 身軀の回りを浮きつ沈みつ三度余り影は見ねぬと、斬り上げて怒鳴  
 しき遊りに且、那様與四郎でムりますと、左も悲しげに訴ふる聲  
 は正しく弟子の與四郎弱味を見せじと、庄太夫泣れまた其處等邊  
 りに彷彿いて居がッたなアと、聲張り上げて怒鳴附れば、又も不  
 議や家の内、併も玉を切殺せし砧石の後に、庄太夫殿何故此髮  
 を揃へさしては下さらぬぞと、幽かに呼ぶは女房か玉乍麼に剛氣  
 の丈夫でも鬼神ならぬ庄太夫、前後よりの妖怪に進みもならず退  
 くは尙更思はず知らず南無阿彌陀佛の一聲を口より漏らして五  
 那様身を覺になき與四郎をば、克くも克くも譯も聞せず暗聲に仕  
 て下されまししたなア、冤の罪に殺さるゝ此身は兎もあれ内儀さ  
 ま、庄ちやんと云ふ可愛子まであるものを、怨めしさに言ふか  
 と思へば、次は又々玉の聲モシ庄太夫殿、何でも其方は、其方は何

も居ず、行燈の準備さへ仕てあらぬに、流石庄太夫も常に變りて物  
 哀れなる心地起り、迷ふたる目に四邊を見やれば、昨夜女房を殺し  
 たる砧石の傍には、血汐の痕の腥さく、得も云はれぬ真氣さ、  
 穿つに小氣味悪く、いや／＼ながら行燈を照らして煙草盆引き寄せ  
 大胡座のまゝに稍暫し思ふともなく、過越方を繰り返す胸に真先  
 浮び來るは人に知られぬ親子の愛、一時は正しく密夫の種にあ  
 んどまで疑ひし庄太郎の身の上より、己が一家の行末なき静か  
 に想ひ回らしては、一旦憤怒の情炎に燒立てられし一身も心の存  
 分に成敗し果し今となりては、さしむに惜かりし女房も幾分不  
 の催ふしけん、數度太息して、フーンと吹き出す烟の輪、次第に薄  
 らぎてひらきゆくさへ氣にとまる、折も折も木枯の微かに送る  
 遠砧初めは左程に思はざりしが、刻一刻に何とやら近くなり來る  
 氣色して、砧の音の響くこと我胸を切らるゝ心地に、負ぬ氣性の庄  
 太夫も是にはホト／＼困じ切り、憂を晴さん爲めとてや、立ち上りて  
 障子押明け、表の方を見ると均しく、今が今までしげく響きし砧石の

でも此身の願ひを聞入れては下されぬ氣かと言はるる度には  
夫、浸すばかりの冷汗に人心地さへ失のふまで只アルく身を  
はし敷居の上で打伏せぬ、斯る折しも表より引ッ提刀、高  
切々に、駈け込み来る一人の老人、乍ら心で慌てしにや、入  
居に俯伏し居る庄太夫の身に目も止らず、駈け入る柏子に  
夫が背の邊をウムと蹴やッて頭倒、庄太夫は是さへ玉と與  
郎が所業なりとや思ひけん、モウ是まで居ながらに取殺さる  
苦を受けんより、力の限り逆らふて、尙其上に叶はずば逃  
遅からじと覺悟を決して身を跳ね起き、其處に有合ふ煙草  
より早く投げ付けば、彼方も白漢身を替して、持ちたる刀に  
止め、庄太夫殿乃公じゃ、泥棒じゃムらぬわ、マア、誰かに  
しやらぬかと、聲かくれども庄太夫、尙も扣ゆる氣色もなく、  
だ此上も庄太夫を誑らかさん術にて姿を替て來をッたなア、  
ひつろキツと立ち上り、寄らば打たんと身構へたり。

其二十四

「コレ、庄太殿、お主も乃公に劣らず、儼てくさッて居るやうな  
何かさしやッたのか、顔を見さしやれ、顔を乃公じゃ須藤、  
じや」と言はれて此方の庄太夫、初めて少し心を落着け、  
れば何様々々、正しく貴郎は中新井の先生と、魂消聲に言ひ  
てば「ア、ハ、正しくにも嘘しくにも中新井の斧右衛門は己一人  
じや、時にマアお主は何の爲めに其様な所に寝るべッて居たの  
や」と、不審打たれて庄太夫少し極々、わろく、固めし拳を解  
す、柏子脱、シロく、と郎、閑が身の回りを詠めあがら、モシ先  
りは貴方の御風俗、髪を亂して追取刀、高、端折を仕て、ム  
何所から見ても鳥羽繪の山賊、殊に何やらお面の色も、逆  
れて斧、右衛門、白髪頭を掻きあがら、コレは庄太殿一本、  
とても知ての通り、鬼と縛名の須藤郎、閑、婆の風、に雷ッ  
十幾年、怖い、の恐ろしいのと言ふことは、女童の、草との  
て居たが、今夜と云ふ今夜、今と云ふ今は、女童の、草との  
とはムらぬわ、ア、思ひ出して、身毛が、戦慄して來ると平素に

似合ぬ弱き音に、庄太夫も心の中にサテはとばかり領さしが、應と  
らしき高笑ひ「ウムフ、は、是は又た先生にも似合ぬ、咄第一に  
マア只今何方からか越なされたのでムリます」然れば何處からで  
もない自分の宅から何時もの道を此方まで「ハテナ先生のお宅か  
ら拙者の宅まで来る途中に此處で申す怖い場所」といひかゝ  
るを郎閑打消し「サア、庄太殿、それだから一層怖かつたのじや、ナ  
ニ平生なら怖い場所だとか、恐ろしい森陰とか云ふのならば、別  
に不思議もないが、此様なことを言つて又お主が氣を悪く仕て呉れ  
ると困るが、實はな、お、主の宅の屋敷裏にある彼の笹藪と思は  
る、邊からな、只つた今其所の裏田浦まで来ると云ふと彼れが世  
俗に云ふ火の玉とでも云ふものであらうか、此大きな奴が一ツ  
宙を飛んで已の目先へ来やがったから、へム小癪など刀を抜き切  
り拂はんぞ仕たところかな、コレ庄太殿、其火の玉か二ツに分れや  
がつて、恰度小兒達が鞠を織るやうに、お主が宅の屋根上まで、交る  
に、行たり来たりして居やがるゆへ、ハ、ハ、ハ、ナ此奴アお玉と與

四郎奴が、お主の爲めに殺されたが、其所が凡夫の淺狭しきで、自分  
を犯した罪のことは考へず、殺したお主や殺させた乃公を怨みや  
がる餘り、浮ぶところへも浮ばれず、此處等に迷つて居やがるかと、少  
時は膽玉を据へて、道の真中に突立つて二の火の玉を視凝して居る  
と、な、終へには火の玉奴が乃公の身体を取寄せやがつて、消にも仕  
けりや動きも仕ねへ、お主の前だが、異休の知れぬに火の玉と田浦  
の中で腕へ比なすは餘り嬉しものじやないて、余儀なく今度は  
恩敵退散々々々々と唱へながら此刀を滅多矢鱈に振り回すとサ  
ア大變、その火の玉奴が二十にも三十にも散り廣がつて刀の刃業  
を渡つて歩きやがるのじや、スルと何云ふ調子か知らぬが、此刀の  
量目が急に重くなりやがつて、チツとも乃公が思ふやうに振り回  
されぬ一件サ、コリヤ堪らぬと逸足早く逃げ出したまでは覺て  
居るが、何處から何處を飛び越て来たか、お主の宅の門先にヤン  
と氣は付たがまだ、何して夢中半分で跳り込む途端、お主が其處  
に寝て居るとは知らず、驟いて頭轉倒、まだ其上に主にまで妖怪

變化と見間違へられて煙草盆の目潰しとは是ぞ眞實の骨灰に  
 イヤモウ面目次第もなき始末と語るを聞いて庄太夫、我身の上  
 照り合すに一人思ひ當らぬはなく口にくさ言はね心には其様  
 今の妖怪は乃公一人ではなかりしかど氣付て見れば又一層  
 耳朶の當りに悲しげある玉の聲の残り居て我身ながらにッ  
 ッとするほど郎閑も共に怖氣立ち二人面を見合して只青息を吐  
 き居たるが斯ては果じと庄太夫自ら立つて勝手元鼠入らすの  
 を探し晝間村の人達に飲せし酒の残りをゆすぶりながら提げ  
 れば斧右衛門も打喜び「チ、寒い時と淋しい時には酒に上越す助  
 勢はない庄太夫を早くナニ火種があるぞそれは又不景氣あ  
 早い勝じや冷も宜からう」と又も二人は酒宴を初めぬ。  
 其夜は二人膝を合せて残りの冷酒酌み交し、隣近き頃まで起きて  
 居るが庄太夫の腰の痛は一時毎に烈しくはなれど更に減する  
 氣色もなげれば流石に今は堪へ兼ね極内々に斧右衛門に明せば

其二十五

種々不思議の續きし後のこと、斧右衛門も氣の毒顔うりや何  
 しても困った病氣だ、チヨツと乃公に見せさせれど、庄太夫の傍に  
 すり寄て克く見れば成程確かに血汐の手の痕氣味悪くは思へ  
 ども醫者ならぬ身の詮方なく何も不思議じや何も變じやと、咳く  
 のみ鬼とも組ん二人の男も是には暫時呆れ果てしが根が茶膳の  
 二人ゆへ左したる事もあるまじとて終へは矢張り茶に濁して只  
 其まゝに打捨置き、外の談話に移る中、夜は全く明放れ軒に雀の鳴  
 き噪ぐ頃ともなれば、斧右衛門モウ此位か明るくなれば火の玉も  
 出はしまし「と、暇を告て懐手、庄太夫方を立ち出で、朝露踏むで我家  
 へ返れば何かは知らず家内の者共頻りにソハ〜と立ち騒ぎ居る  
 に予、斧右衛門は留守の間、何事の出來せしにはあらざるかと胸  
 森かしつ、内へ通れば、長男の斧彌顔色を變じて、駆け出し來り、モ  
 シ阿父さん、た、大變なことが持ち上りましたと、言ふに斧右衛門  
 も打驚き、大變なことが、は、そりや又何だ、何だ、か彼だか、理屈も  
 解りませんが、姉さまが、昨夜の丑満頭から、急に大熱か發して」と、皆

まて言はせす、郎開引取り、ナニ糸江の奴が、大熱を發して、アノ大熱  
 を「と、言ひつゝ、ウムと腕拱ぎ、ホツと吐息を漏せしが、然して今は何  
 處に居る」ヘイ彼の阿父さんのお居室に寝まして置きますが、夜の  
 引明頭から、少し熱も退き、夜中狂った疲れにやトロく、と睡りかけ  
 たところ、でムいます「フーム其様なら夜中彼の狂ひ回ったのか」イ  
 ヤモウ狂ったの狂はないのではありません、それも只狂ふばかり  
 なら何のこともありませんが、血眼に爲て髪の手を逆立て、汝れ須  
 藤斧右衛門、正直一路の良人、庄太夫を煽かし、刀までも貸與へて此  
 身ばかりか、與四郎まで克くも、殺して呉れたな、ア、人に怨みのあ  
 るものか、ないものか、今に予思ひ知らせて呉れん、と大聲揚げて怒  
 鳴るかと思へば、今度はメソク、出しながら、玉どの妻が悪かッ  
 た、何卒堪忍してくだされ、庄太夫殿のことはフツツリと思ひ切る  
 から、何卒堪忍してくだされ、ア、苦しい、ア、切ない、と言ふ其時は  
 姉さまの聲音、當人よりは端に居る私共の方が、モウ、氣味が悪く  
 て困りましたと、逐一語るを聞き居る郎開、フーム然かと鎮くばか





出せば、斧右衛門も居堪らず、悔無阿彌陀佛を唱へつゝ、室を出んと  
 やらぶ玉に似て見ゆるに、斧彌は眞先怖氣立ち、父を捨て置き逃げ  
 刀じゃ、思へば、其脇刀が怨めしいッと言ふ聲よりは、面影まで、何  
 しては、くだされたな、チ、夫じゃ、此方が今腰に挿して居る其脇  
 くも、此方は如何に我娘が可愛くて、一人ならず二人までも殺さ  
 振り、イヤ、其方の父じゃ、緊乎せよ、氣を確かた、と呼べど、叫べど、頭を  
 已じゃ、其方の父じゃ、緊乎せよ、氣を確かた、と呼べど、叫べど、頭を  
 右衛門と叫びながら、にキリ、と齒を食ひしはる物凄さ、コリヤ娘  
 より血相替へ、ヒイと言ひさま、夜具を跳ね退け、直りて、汝れ斧  
 の氣もなく、眼を睜き、ソル、と、四方を睨め、回し、父郎の面を見る  
 と、熟視る眼の中は、流石涙を催ふしけり、兎角する中、娘糸江は何  
 へ、頬骨さへも尖り出、見る影もなき有様、に郎閉ヒ、と、呆れ顔、チッ  
 ヌヤ、と、眠る娘の糸江、只、た一夜の熱病に見逢へるまで、顔色衰  
 娘糸江が臥し、戸に行けば、屏風の中に、仰向きのまゝ、左も心地よげに  
 り、何と返答も出ざりしが、兎もあれ、娘の顔を見んとて、斧彌を先に

操れども如何なる途端か衣服の裾屏風の角に引ッかゝりて、一步  
二歩踏眼どころへ、のしか、ッたる娘の糸江、丈より長く亂れたる  
黒髪、の先にてサラ、と斧右衛門の顔撫で拂ふに、何かは以て堪る  
べき、左なきだに氣も心も狂ひし折とて、前後左右の分別もなく、我  
を忘れて、刀の柄に手をかくれば、糸江は尙も眼を瞞らし、ア、斧右  
衛門殿、此方は妾を切る氣じやなア、何處からなりと切て下され、早  
く切しやらぬか、と、叫びながらに、サリ、と斧右衛門の目先へ詰め  
寄たり。

其二十六

斧右衛門乍、塵に心の狂へばとて、娘の顔を忘れぬ限りは、刀に手を  
掛る等、はなげれ、早や此時の斧右衛門が眼の玉には娘の容貌は  
映らすして、いと怖らしき、玉の姿に見ゆるばかりか、血眼に爲て  
狂ふ有様、叫ぶ毒口、一として、玉の聲をやらぬは、なく、是も元より  
斧右衛門の良心に、一点の曇りなき身ありせば、縦や現在の娘の姿  
が正しく、玉に變ずればとて、洒落にも切るの擲ぐの、と云ふ無慈

悲の念慮が浮ひ出づべきにあらねども、何を云ふても昨夜よりの  
變化と云ひ、不思議と云ひ、衣分に心の怯けし折、玉の盤が爲する  
業とは云ひあがら、元を糺せば、我身の錆、汝れと云ひさま箱を鼎ッ  
て支ゆる糸江の細首を發矢と切れば、ア、無殘、ヒ、と一擲、叫ぶ  
間もなく、娘の首、前に落ると、諸共に血煙り立て、打斃れぬ、此物音を  
聞きつけて、亦引ッ返す、長男の斧、彌、血刀提げて、突立ちたる父の身  
跡を、緊乎と抱き止め、ヤ、阿父さまには、氣が狂ひなされしか  
姉様の身に、何科あつて、此有様、と、周章ながらに聲立つれど、斧右衛  
門は、耳にもかけず、娘の首を、足の先に蹴散しなから、小氣味宜げに  
高笑ひ、ア、ア、ア、ア、ウ、ア、ア、ア、ア、是で漸く清々とした、ア、其方  
ア、斧彌か、喜むで、呉れ、乃公は今、妖怪退治を仕たところじや、ア、ハ、  
、ア、ア、ア、と、笑ふ顔色、本氣の沙汰とは見ねざりける、斧彌は益々驚き  
て、モ、阿父様、兎もあれ、刀は收めて下さい、危険な、斧彌は益々驚き  
せんから、と言ひつゝ、無理に父の手から脇差を掻き奪り、一層聲を  
高くして、阿父様、貴方は何か爲されましたか、ウ、ア、ア、ア、斧彌

りなれ玉

汝ア妙に大きな聲をするやうだが、汝が方で何かしやしないか」と  
 答ふる調子も常に異りて、眞人間とは見ねざるに、芥瀬も流石に  
 持て餘して居るところへ、心利たる僕の久平遅ればせに來るを幸  
 ひ二人共に力を協せて、猛り狂ふ父親を次の一間に押籠め置き、極  
 内々に糸江の死骸を取片付け、口を箝みて居たりしが、秘すること  
 は漏れやすく、初七日も過ぎざる内、此事何時しか近郷近在の噂さ  
 どなり、ヤレ中新井の鬼右衛門は、此玉の祟りで氣が違ひ一人娘の  
 糸江と云ふを切り殺したと云ふものあれば、成程々々然言はるれ  
 ば此頭は鬼右衛門の面を見たことおないと言ふもありて、三ツ四  
 ツの女小兒に至るまで此風説を知らぬものなきに至りしが、それ  
 と同じく亦下新井村の庄太夫は、宛の濡衣に女房の玉と穢人の  
 與四郎を切り殺したる怨みにて、毎晩々々二人の魂魄が火の玉に  
 爲て立ち現れ、庄太夫を惱ますとの評判も知らぬ者なきに至りし  
 のみか、中には現在火の玉をば、彼所で見たと此所で遇ふたと言  
 ひ出すものさへあり心かは、誰云ふとなく、玉化物と呼びなして

りなれ玉

寄ると障るとも玉化物の談話ばかり、人の噂さの七十五は愚か  
 ること、百日が千日、三年が十年過ぎ去りても、玉化物の噂さは愈  
 よ高く爲り行くばかり、現に二百年近く的光陰を過ぎ去りし十日  
 此頃ですら、尙下都賀の地方に、玉化物の來歴を知らぬは稀なり  
 とぞ。  
 開は却説き、中新井村の庄太夫は彼の朝斧右衛門が立ち去りし後  
 に尙腰の痛みの堪にがたきまゝ、亦々一室に引籠りて身を横に臥  
 したる折しも、御免なさりませと、台所口より、飯枯聲に訪ふ者のあ  
 る容子に、庄太夫は不審ながら起きも直らず、高調子「誰か知らぬか  
 今朝は少し取込みがあつて何だから、明日にでも來て貰ひやしや  
 う」と断り言へば、爾仰しやるは且那様じやムリやしねか、片柳の  
 老爺でムリやんす、ハイ與四郎奴が親父の與左兵衛でムリやんす  
 が長いこと病氣で寝みやんしたもんだから、飛でもねへ御無沙汰  
 を申しやんしたと、病氣揚句の力もなげに言ふ聲を、内に聞取る庄  
 太夫、ハテ飛んだ白物が舞ひ込むで來たわね、併し彼の口振では、まだ

何にても知らぬ老人の前にて其方の子は此庄太夫が殺せしとは流  
 第にても知らぬ老人の前にて其方の子は此庄太夫が殺せしとは流  
 りながらに割なき頼み聞く庄太夫も不憫さ加はり實は斯々の次  
 とかすみし眼に溢る涙を極油で忘しめたる如き手拭で拭きや  
 郎奴に暫時の暇を下されませうハイ何卒願は申しやんす  
 出て参じやんしたなら何卒且那様此老若を不憫と思召して與四  
 が顔をみてはッかりにハイ女々しいこと、は知りあおらハイ  
 やんして、まだ起て歩かれた譯じやムリやしねが、與四の野郎  
 ウ起ても寝ても此方へ来て居る與四の野郎が事ばかり苦になり  
 何仕やすと、妙に氣が愚痴にあるもの、自分の身が病に取付れたり  
 しねに、年は取りたくないもの、自分の身が病に取付れたり  
 ア全快さず、たなア然れば、且那様、また全快した次第じやムリや  
 こどだ、一里半もある所を、此様な、早く来られるやうに克く  
 は然と、與左兵衛殿、聞は、前は、此間まで、太居病氣であつたと云ふ  
 宜しが、家の方、は、何時も、一、人、に、任、せ、さ、り、だ、も、の、だ、か、ら、う、れ  
 是、然、と、與、左、兵、衛、殿、聞、は、前、は、此、間、ま、で、太、居、病、氣、で、あ、つ、た、と、云、ふ  
 是、然、と、與、左、兵、衛、殿、聞、は、前、は、此、間、ま、で、太、居、病、氣、で、あ、つ、た、と、云、ふ

一昨日の一件を知らぬやうだが、イヤ、此一件が今日まで知れず  
 に居る筈はないが、と暫時途方に暮れたりしが、まよ、何せ知れず  
 にや、居ねにことだ、罪科もねに親父に對しちやア、チート氣の毒  
 だが、向ふから言ひ出さぬ先、此方からアチ明けてやうと、自問自  
 答に量見を据は、今更初めて悟りしごとく、チ、誰かと思つたら、與  
 左兵衛さんか、サア、此方へ上るが宜いや、實は少し腰が痛むで、人  
 に遇ふのが面倒なものだから、断りを言つて見たが、お前なら、ナニ  
 氣づまりでも何でもねに、サア、ツツと此方へ通るが宜い  
 其二十七  
 與左兵衛はトホ、足を踏みしめながら、庄太夫の居室に通りに、感  
 熱に頭を下げ、是は且、那様、お久振りであら、目にか、りやんした、克く  
 マアお變りもムリやんしね、又、伴の與四郎奴は、格別の御最儀を  
 受やんして、ハイ、と、田舎氣質の飾り、あく挨拶述べ、る、與左兵衛の顔  
 を、庄太夫は何氣もなしに、差覗きて、可哀さうに、また、我子の成行を知  
 らぬやうな、おと不審の、面地、モウ、思ふやうに、掘介が、出来れば

石に明し兼ねたる夫のみか、燕々思へば此身にも庄太郎と云ふ  
子まである例へ我子が盗みをして世間の人に擲かれてさへ我子  
の罪より先づ先の擲いた人を怨むのが世間の親の心ぞかし、  
我ながら一時の憤怒に氣を奪はれ、罪なことを仕てけるも初め  
少く後悔の色は見ねしか、闇の夜の道中に後から来る提灯は  
何の役にも立ぬの道理、又今更に死したる奥四郎蘇生らして戻す  
手術もなく、最初と左兵衛が顔見ざる中は、寧ろ打ち明けて戻す  
とまで極めし覺悟も何所へやら如何せん、左つ右つ、胸の高波  
瀾くばかり、奥左兵衛涙の言葉を續ぎ、就ましては且那樣、  
も、の仕事に居りますか、ドリアアア一目逢ふて參じやんしや  
うと立ちかゝるを庄太郎慌て、呼び止め、コレ、奥左兵衛さん  
てや、待たから、仕事場には居りませぬわ、追付け戻って来る  
兵術落膽、ア、左様で、ムリやんすか、飲まじやれ、言はれて、  
兵術落膽、ア、左様で、ムリやんすか、飲まじやれ、言はれて、

太夫の顔を何ともつかず、アツと凝視め、モ、且那樣、倅は全く、  
に參つたのでムリやんすか、な、と、訝しうに問ひかけられて、  
夫、疵持つ足の小氣味悪く、變なところ、に、念押とは思へども、  
あらぬ体にもなして、全く、何より証據、今にも戻って見、  
うほ、に、少し待て居さしやれ、と、又欺されて、奥左兵衛は、  
で、ムリやんすか、と、不精々々に答へし、か、何所やら、  
見ゆるは、所謂、虫が知らず、に、や、あらん、奥左兵衛は、  
夫、久振で、此方へ出て来た、次手に、水代の、五左衛門様と、  
ハ、ア、久振で、此方へ出て来た、次手に、水代の、五左衛門様と、  
ヨッ、ラ、行で、參りやんすから、一寸の暇、御免を被むりやんす、  
ふ、に、庄太郎は、心の中、一寸延れば、尋の壁へ、だ、老爺が、  
る、間、に、何様な、智慧か、浮ばぬものでも、ね、と、思案して、  
夫、じや、然しな、さるが、宜い、其中、に、や、ア、奥四郎も、返、  
か、ら、と、調子、よく、言へば、奥左兵衛も、正直の、面、に、喜、  
様、なら、ば、且、那樣、一寸、と、行、て、參、り、や、ん、す、と、腰、の、當、り、を、撫、  
りな、い、玉、ね、

(一廿百) り ない 玉 ね

奴等をば本夫たり主人たる我が威光で成敗してやりしを難有し  
とも思はず怨霊となつて此庄太夫に仇ひろぐにやあらん此期  
に及びても尙庄太夫はた玉與四郎が身の上を洵どの濡衣とは知  
らざりしが流石に又考に直しては不憫の情を引起したることも  
ありしかど何分毎夜の妖怪と腰の痛み去らざるには仕て見るべ  
きやうもなく殊に常は召使ひたる職人共まで玉與四郎の切  
害されたる翌日限り暇も乞ふ皆立ち去りて跡々廣き田舎屋に只  
一人の男住居子分等の時々に訪ふことはあれど是とも昔か玉  
化物の噂に心怖けて晝さへ長居するものなき有様のみならす  
力ど頼む中新井の郎閑は發狂の氣味にて座敷半の住居を聞ては  
我身ながら時刻も違へず二ツの火の玉目先に現れ彼の砧石の傍  
さへなれば時刻も違へず二ツの火の玉目先に現れ彼の砧石の傍  
には人もあらぬに布揃つ音月の夜半には涙に濡しく雨の夜半  
には沈みて凄く眠らんとすれば耳元には玉與四郎二人が聲う  
の悲しげに哀れなること物に例へんやうもあし。

り ない 玉 ね (十二百)

がらドツコイショ立ち上つて土間に下り杖を力に出で行く  
兵衛が後見送つて庄太夫思はず胸を撫で下しア、今は爲て考へ  
れば氣の毒なことを仕て仕舞た南無彌陀佛々々々々々それ  
まア兎も角も今にも又與左兵衛の老爺が返つて来たらば今度  
何云ふ工面に欺してやろうハテ斯してか彼してかと思案の半ば  
へ慌しく訪ひ来る一人の若者呼も急しく辭儀もろく「庄太  
夫様と仰やるは此方でムリやすか彼の私は片柳から参つた飛脚  
の者でムリやすが今朝の明方此方に來て居る與四郎さんの實父  
の與左兵衛老爺さまが死亡なりやしたからうれで知らせに参り  
やした葬式は今日の七ツ半た寺は富田の玉生寺でムリやんす  
云ひ捨て元來し方へ馳せ行きたり庄太夫は二度吃驚我を忘れ  
て戸口に駈け出でうんなら今來た與左兵衛はアッヤ正物じやな  
かつたかフームとばかりにロアンゾリ茫然として二の句も出ず  
其二十八  
心の迷ひか狐狸の所業か乍麼なれば不義不貞を働きたる人非人

薄情と云ふにはあらねども、質撲なる村人等も一時は正しく庄太夫の女房が姦夫狂ひをせし爲めに切害されしと思ひしことゆゑ氣の毒あがらも自業自得じや、庄太夫は流石に男を磨く氣象だけのことがあるを賞めたりしが、僅か二三日も過ぎる中に、ヤレ右衛門は氣が違ふて一人娘の首を切たの、ヤレ庄太夫の家の屋根には火の玉が出るの、云ふ評判バツと立ちたるより、さては玉と與四郎は全く姦通して居たのでなく、冤の疑ひを受けし怨みで種々の祟りをするならんと、十人が十八共の判断に昨日までエツイと庄太夫を賞めたる口にて、今日は早や庄太夫を無慈悲無分別の無頼漢と呼びなすに至りしかば、庄太夫の男も俄かに瘧り交際ものさへなき始末、左なきたに蛆の湧くてふ男、況して病に臥せる身の己が食物拵にすることも隨意あらぬ此頃とて、家の汚なきは云ふも更、庭の隈々屋敷の隅々まで、蓬草のみ生ひ發延り、二月三月過ぎる間に、昔の像何處へやら、墳生の里の詫住居にはあらなくも月漏る櫓は雨も漏る、實にや果敢なき慘狀となりしより、何に

も知らぬ小兒等まで、庄太夫が屋敷をばね玉屋敷と呼なして、只無性に怖がりける。  
 斯て其年も暮れ、明けは享保元年一月、世は新玉の初春に、松竹立て祝ふなる目出度中に、只一人、荒蕪すさみにし茅舎の櫓に、イモ夕まぐれ、半年餘り梳らざる髪は亂れて、月代生ひ、顔色蒼白、頬肉落ち見るかげもなき姿にて、左も苦しげなる青息吐き、田向ひ方に老向ひね玉堪忍してくれ、全く乃公が悪かつた、與四郎地忍してくれ、全く乃公が悪かつた、今に爲て考ねれば、皆な中新井の狸老爺に欺されたのだ、モウ此分では兎ても助かりさうもね、お、責めては腰の痛みだけ、アイマ、何卒一生の頼みだから、今夜からは、彼の碇石の音を響かせてくれるな、彼の響きが初まる時と云ふと、此腰が急に痛み出して、此頃ではモウ坐ても起ても居られぬ幸さ、死ぬる命は、チツとも惜くはね、お、此痛だけは許してくれ、と、病みはうけて、凹みたる目の中より、ボロリと溢す熱涙、克く辛らき苦痛と見、今は漸く我も折て、我身の前非を悟りし容子ア、今日も又暮れ

るさうな、ドリヤ燈火でも照さうか」と、足引摺て内に入り、燈火の準備にかゝる折しも、表の方にかやゝと數人の童兒が立ち騒ぐ聲、庄太夫不思議と小耳を聳つれば、七八才の腕白らしき餓兒大將、竹にやあらん木にやあらん、棒もて頻りに土を擲きながさう、皆來い、向ふへ來たのは中新井の鬼狂人じゃ」と、合圖をすれば、他の小供等も一聲に「爾じゃ、鬼右衛門じゃ、皆して石を投げつけてやらう」と、又もドワーッと駈けて行く。

其二十九

廓然已れの非を悟つて、昨日の所行を省れば、宛あがら襟元に冷水を注がるふ心地して、我身ながらにアツとするなごは有うちのと、況してや吉澤庄太夫、例へ一時は郎閑の言葉を信じたる怒りの矢先とは云へ、罪科もなき二人をば切害あせしことなれば、心嬉しき筈はなく、殊には夜毎に現るる玉與四郎が亡靈と云ひ、腰の節關の痛と云ひ、一ツとして庄太夫が身を責めさいあむ及ならぬはなく、また其上に初めから己れを煽動して親切をかしの万まで貸

て呉れたる須藤すらも發狂して、枕こそ交さね後妻と定めし娘の糸江をば親の手づから首打ちしことあごを聞に付け見るに付け心細さの増すばかり、鬱々無聊に日を送りける其中にも與左衛門方に預けある我子庄太郎がことあごを思ひ出しては男泣き、罪なことを仕たわへと、稍良心に立ち返る、次には何時も女房が狂夫狂ひも全く宛の濡衣にてはあらざりしかどの疑ひも起る、其ひの起るに付ても、二人が怨靈の祟ること、須藤郎閑が狂氣のことなど、彼れや是やを照り合せて、我と我胸押し糺せば、成程雨でありけるか成程斯でありつるかど、今更に爲て思ひ當る節多く、愈よそれと考にを定めて見れば己が手に切殺したる兩人が執念き怨みも無理ならずとは云ふもの、此怨みを受させるに及びたる原因はと云へば誰あらう、我身の平生愚直なる氣質を見抜て、有こと無こと焚きつけし須藤の老爺が策略を知らずに乗つた己の愚鈍と諦めてさへ仕舞は何のことはなけれども、サテ諦められぬ郎閑が所爲、何時か一度は踏む込むで、彼の老者と刺し送へて死ぬまでも



此恨みをば晴さにや置かねど心は矢竹に思へども相手は何分狂  
 氣の身已れは腰の痛みにて半身不隨に均しき身体思ひ決して暗み  
 出すべき力もなくありける矢先今しも村の小童等が中新井の  
 鬼狂人鬼右衛門が來りしと騒ぐを聞て庄太夫は家は家内が看護の  
 隙を伺つて座敷牢を脱け出し來たに相違なし願ふてもなき幸ひ  
 かなイサ此方へをびき寄せ狂人ながら理非を説き先に己れを欺  
 むきたる罪を詰つて其上に洵と理解が分らずばモウられまて不  
 憫あがら擲き殺して腹癒さん病みはうけても吉澤庄太夫狂人老  
 爺に引や取るべき然じやと頷きて待とも知らず斧右衛門破れ  
 袴の後前を取違ひて足に穿き外六方に肩胛突張り昔の口調はま  
 だ失せで多勢付き添ふ小童等を追ひのけながら門口より庄太  
 夫は在宅でふるか中新井の鬼じや鬼右衛門が參つたといと大病に  
 入り來るを庄太夫待ち兼しと云はぬばかり大喝一聲斧右衛門を  
 尻眼にかけアノ此所な狸老爺奴何の面下て庄太夫の宅へうせを  
 つた」と怒鳴りつくれば斧右衛門ケロリと敷居の上に行ふこれは

面白く面白くことを持ち上ったわへ庄太夫先づお聞やれ已が  
 娘の糸江はあ此方に惚れて焦れ死此方の女房は玉はあ乃公が此  
 手で切り殺しうこで化がヒウドロく」と節をつけて濡ひながら  
 に踊り出しては高笑ひアハハハ何と庄太夫は面白くことではな  
 いかと又立ち止まッてケロリカン庄太夫は可笑さ堪へて立ち上  
 りモウ是まで何と云ふとも糖に釘穿る最初の思ひ通りに打さ  
 してやらすんすど物を言はず郎の襟髪つかむで捨舞せば不  
 意に驚き郎閑は大聲上げて泣き出す庄太夫如何な手を休めず傍に  
 有合ふ丸太もて骨も砕けと續け打乍麼に須藤斧右衛門本性あら  
 ば克く聞け荷にも此庄太夫と義兄弟の契を結びあがら出返り娘  
 の糸江がやり場にも窮する余り此庄太夫に押付ん策器にて罪もな  
 く過失もなき我女房か玉を初め正直一逼の奥四郎まで此庄太夫  
 に殺させしよな今こころ思ひ知り居らうと泣ばかり心狂ひし悲  
 打て打て打据ゆれば斧右衛門は只ワ〜と泣ばかり心狂ひし悲  
 しさに詫び入る術も知らざれば庄太夫は心のまゝに打ち懲しヤ

ッど一聲氣を込めて最後に下せし一打に的り塙所や悪かりけん  
ウームと云つて息絶たり庄太夫は小氣味よけに微笑みて「アハ、  
、思ふたよりは意氣地のね」と見向きもやらす内に入り行燈の  
下に坐を正して何か思案の折から珍らしや玉の寶兄與左衛  
門、甥庄太郎を肩に負び提灯片手に尋ね來れば庄太夫は打ち驚ろ  
き、こは珍らしき御來客と上座に通せば與左衛門時の辭儀もすま  
ぬ内背を這ひ下り庄太郎「ヤア父さんが居るよう」と嬉しさうに  
叫びながら父の膝に取組る庄太夫も思はず知らず悦び聲「チ、坊  
か」と抱きしむれば見る與左衛門も共々「何と庄太夫殿、親はなく  
とも子は育つと世の譬へ、僅か半年見ぬ暇に少しは大きくなりま  
したか」と言はれて庄太夫面目なげに下俯向き「イヤモウ其様に仰  
しやられては、今更穴へも這入らねばなりませぬが、全く一時の行  
違ひから罪もなき女房や弟子を彼様なことに仕て仕舞ましたも  
ソレ其門先に打斃れて居ります老嫗に欺されたので」と言ひか  
るを與左衛門打ち消して「イヤ、庄太夫殿其方の心にも全く一時の

行違ひであつたことが解りましたか「イヤモウ面目次第もムリま  
せぬ「アハ、アハ、うれさへ解れば已往は咎めずじや、誰の罪、彼の罪  
と今に爲て詮議だては野暮の至り、唯此上は庄太夫殿、非期の最後  
を遂げた妹のお玉や職人の與四郎が菩提をば懸ろに吊ふてヤッ  
て下され、實のところ久振で與左衛門、此子を連れて訪ねたのは、餘  
りに此兒が兩親を慕ふ不憫さに、老少不定の世の中ゆへ、何方の身  
躰に今日が今、萬一のことがないとも限らず、殊に此頃唯に聞けば  
此方の病氣も日増に重くなるものこと、何方に何様な答があるに  
もせよ、切るに切られぬ血筋の親子、責めて一人の父親が顔だけな  
りで見せ置かんと阿母にも相談の上で、今夜訪ねて來たわけだが  
其方がお玉への疑ひも、今は全く晴たと聞き、何より嬉しうなるわ  
けり。

其三十一

庄太夫與左衛門の兩人は、庄太郎を中に尙も一別以來打重ありし

さへなさをれは娘も殺さず我身も威張り目出度一生を終るべき  
さ右衛門とも云はるゝ身が心がらとは云ひあがら悪と知りつゝ  
庄太夫を欺むきて一人ならず二人まで切害なさせし剛は的儀  
か半年を過ぎざる間に却て又庄太夫が手に斃れてまた其上に世  
間には碌でなしの大悪人のと末世までも誹謗を受けるに至りしこ  
ろ是非もなきことゝもなれ。  
開は却説き玉の實兄與左衛門は其夜再び庄太郎を作ふて田向  
ひ坪に返りしが後に熟々庄太夫一ツは我身の先非を悔ひ又一ツ  
には與左衛門が親切の心根に感ずる餘り數年以來麻さへも明さ  
りに佛壇の中に燈明捧げ時々は低頭て玉與四郎兩人が回  
向に小夜の更くるも知らざりしが春とは云へど肌寒き隙間の風  
に心付き重き頭を掻ぐれば燈明の影はの暗き後ろにメツシリ二  
人が像庄太夫殿モウ疑ひが晴れましたかど細き聲に言ふかと  
見ればアナ婿しや今が今までキリと時を定めず痛みける腰の  
痛みは拭き去りしごとく打忘れ心地さへも何處となくいと清々

物語りに時を移してありける處に須藤郎閑が僕共并彌と共に  
閑が行衛を探し來しにやらん庄太夫方へ立寄りて若しや此所  
等へ見にざりしかどの尋ねに庄太夫素知らぬ顔チ、然う云へば  
先刻小童等と頻りに其所で喧嘩をして居たやうだが克く探し  
て見なされと言ひ放しにて様子ビツンヤリ内に這入れば并彌及  
び僕輩は手持無沙汰に返らんとする其足元に男の死骸是や何者  
と驚ろきつゝ克く見れば思ひきや紛れもなき郎閑あるに并彌  
彌は元より僕等も一時は痛く驚ろきしが實を云へば昨年八月  
以來持て餘ましたる狂人親父死だすが持けの幸ひと悪人の子に生  
れたる并彌だけ僕等にも打合して父の横死を深くも歎かず又細  
かに調べもせずいと酒やかた撥き荷ひ中新井の自宅にこそは引  
き取りしが這を知るものは其場に立會し者の外誰一人もあかり  
しかば中新井の鬼右衛門は全く玉與四郎の怨讐に取付れ在ひ  
死にいたばりしこの噂にて萬事事なくすみたりしは庄太夫が  
身の爲めには不幸中の幸ひあれど近郷に聞にし門閑と云ひ狂氣

しくなりけるに予、庄太夫思はず聲を上げ、玉與四郎、全く乃公  
が悪かつた、何卒堪忍仕てくれよ」と合掌すれば二人の影、左も娘  
しさうに頷きつゝ、何處となく消え失せて忽ち變る二ツの火の  
玉砧石の周圍をば、二度三度彷徨ふて西の方へ飛び去りたり、庄太  
夫は宛ながら夢の覺めたる心地、其夜はトウ／＼寝こやらす、東の白  
むを待ちかねて與左衛門方に尋ね行き、玉の實母及び與左衛門  
夫婦に面會し、改めて我身の先非を謝び昨夜來の一伍一葉を物語  
りし上、與左衛門の許可を得て、玉の實父金左衛門が晩年の頃屋  
敷裏に結び置きたる直入庵のまだ其まゝに保存しありしころ幸  
ひと之を借受け、或名僧の誠を得て、昨日に變る圓頂黒衣、名も其ま  
ゝに直入庵、雪降る朝、花散る夕、さては松吹く秋風も無情の色や先  
立ちし、玉與四郎が亡魂をいと懇ろに弔ふて、後世の大事を祈り  
つゝ、六十四歳を一期として、寛保元年辛酉十二月二十一日、弘智の笠  
に法の杖、彌陀の淨土に施立ちて、殘る篋は唯八字、南無凍嶽金滿  
信士。

お玉 稻 荷 備 考

- 一 お玉稻荷の社は栃木縣下野國下都賀郡水代村大字下新井村の鎮守大杉神社の右側に在り  
明治四年三月同村の有志相圖りてお玉石と名ひ傳へたる彼のお玉が殺害されんとす  
る時髪を梳らんとせし砧石を土壁に据に其上に小祠を立て以てお玉の靈を祀る効驗顯著  
ありとて近郷の婦女參詣する者最と多し
- 二 お玉屋敷は同大杉神社の地續きある裏手にある藪中にして何人も住ふものなきより今は  
同村の共有地と爲し學校の附屬地と爲し置くことす
- 三 お玉の庄太夫の殺害されしは正徳五年八月二十三日(今より百七十九年以前)の夜にして  
法名を確正貞直信女と呼び今尙某寺の過去帳に存す
- 四 五ッ辻の地藏尊は施主新井村吉澤〇〇(文字不明)門正徳六丙申の丑二月關空千秋信士  
と彫みあれども由來詳らかならず案するに吉澤庄太夫親族中の或者が與四郎殺害された  
るの翌年新たに建立したるものにやあらん
- 五 殺害の脇差に就ては種々の珍説あれども其後須藤藤郎閑の子孫某なる者同郡曲ヶ島村葛生  
右京の伴久太と云へる者の許に質入せしが何分妖怪きことのみ打續きしより右久太奉納  
主となりて明和二年三月中慈芳僧正の代岩舟山蓮華院高勝寺へ納めたりとの説確實なる  
者の如し
- 六 庄太郎の行末は事甚だ判然せざれども田向ひある叔父與左衛門に育られ成人の後父庄太  
夫の家名を次ぎしが其子伴藏と云ふ者の代に至り同郡富田村の貸座敷上州屋文太郎方の  
遊女さたと云へるに深く馴染め遂ひに此さたと情死を遂げたるより吉澤の家は茲に全く

- 七 断絶するに至りけるを
- 七 玉の實家田向ひ坪の屋敷も今尙歴然として保存す中に玉の實父田村金左衛門及び實兄與左衛門兩人の石碑あり好事家は往きて見るべし然しながら同與左衛門方廢絶の理由は詳かならず
- 八 職人與四郎の法號及び其他の事實は甚だ不明なるを以て著者の附會したる点も少なからず讀者幸ひに諒せよ
- 九 岩舟山に玉腰掛の松と云ふものあり傳説にあれば彼の脇差が同山に奉納されたるの時二箇の火の玉毎夜同山に現れ其松の木のある邊りに息ふたるより斯く名けたるなりと記者が本編起稿の初め玉の事實取調べに就ては水代村の有志家田村哲三郎及び今井繁次の兩氏大ひに其勞を取られたるを以て茲に卷末に記して永く兩氏の鴻恩を記感す
- 十 誤植 本書の初め玉いなりはしが二行目の上日ぬとあるは及ばぬの誤植なり

お玉いなり (大尾)

明治二十六年十月二十六日印刷  
同 年十月三十一日發行

實價金拾四錢

著 者 小 林 芳 三 郎  
栃木縣河内郡宇都宮大字  
江野町廿二番地寄留東京府平民

發行兼印刷人 内 山 港 三 郎  
栃木縣宇都宮大字  
五十四番地

印 刷 所 宇 陽 活 版 所  
栃木縣宇都宮町大字  
塙田百五十一番地

發賣所 集英堂書肆

